ZINE・19 ― 2020・冬

「生の拡充／生のサンジカ」プロジェクト・2019

菅孝行「TALK ＆ DISCUSSION」
私の「戦後史」―「改元」の季節の後に」

生・労働・運動ネット　富山

はしがきにかえて

この間、私・たち「生・労働・運動ネット富山」は、支配権力に対抗的な言説の創造に向けて、自由な討論・学びの場を営んできた。

日本史上最大の民衆騒動である 1918 年の『米騒動』から 100 年目の 2018 年に私・たちが企画した「『米騒動』100 年プロジェクト」では、『米騒動』後の 100 年の民衆運動の歩みを、「全ての生の無条件の肯定」を求める民衆同士の「結び＝合い」・「組み＝合い」（私・たちはそれを〈生のサンジカ〉と呼んでいる）の軌跡としてたどり直すことを試みた。その最終回の集い（2018 年 10 月）では、「ネオリベ攻撃」による私・たちの「生の保障」の破壊の中で、「生の再生産」領域が支配権力との攻防の大きな焦点になっていることを改めて確認した。

2019 年 1 月から 12 月にかけて私・たちが企画した「『生の拡充／生のサンジカ』プロジェクト・2019」では、そうした論議の〈先〉へと向かうことを目指して「生の再生産」領域での自治・自律の可能性を探ることや、2019 年の天皇の「代替わり」に伴う「天皇とともに歩んできた『国民』キャンペーン」とその中での「戦争責任」・「戦後責任」の忘却・「不問」化にどう対抗するか、ということを大きなテーマとしてきた。「プロジェクト 2019」では、そうした２つのテーマを軸として「生・労働・運動ネット富山」のメンバーが報告を行ったが、その他、「TALK ＆ DISCUSSION」と題して、戦後の日本の労働運動・労働者文化を研究テーマとしながら海外の反グローバル資本主義運動を積極的に紹介している入江公康さん（19 年 1 月 12 日）、フェミニズムの視点から日本の社会保障・福祉制度への批判を行っている堅田香緒里さん（19 年 4 月 28 日）、劇作家・批評家で反天皇制運動に深く関わっている菅孝行さん（19 年 12 月 7 日）の 3 人を話し手に迎えた。

このパンフレットは、その内の菅孝行さんの「TALK ＆ DISCUSSION」でのトークとその後の「フリートーク」の論議を収録したものである。菅さんには、「『米騒動』100 年プロジェクト」の最終回の集いでも 3 人のコメンテーターの 1 人として話してもらったが、「プロジェクト 2019」では、菅さんをメインスピーカーとして、「私の『戦後史』――『改元』の季節の後に」と題して、菅さんの幼少時から現在までの軌跡や、演劇運動と社会運動との関わり、菅さんがこれまで考えてきたことなどを存分に語ってもらった。

今回、そうした菅さんの軌跡に接することで、菅さんの運動的なスタンスや思想の核となっているものに身近に触れることができたように感じている。また、今回のトークの中で、菅さんは、「生の再生産」領域での〈生のサンジカ〉への手がかりを探りたい、というこの間の私・たちの運動のテーマ・モチーフに対して、何度も共感や賛同の意を示してくれたが、そのことは私・たちにとって大きな励みとなっている。

最後に、ご多忙な中、二度にわたって富山にお出でいただくとともに、富山でのトークの原稿に丁寧に筆を入れていただいた菅さんに、改めてお礼を申し上げたい。

なお、「プロジェクト 2019」のプログラムや、「TALK ＆ DISCUSSION」での入江公康さんと堅田香緒里さんのトークの内容については、「生・労働・運動ネット富山」のホームページをご覧いただければ、幸いである。

2019年12月7日

TALK & DISCUSSION　菅孝行さん（劇作家・批評家）

「私の『戦後史』――『改元』の季節の後に」

Ⅰ.「国民統合装置」としての天皇制をいかに「無力化」するか

はじめに

菅孝行さん

ご紹介いただきました菅です。

今日の集まりでは、「私の『戦後史』」というタイトルで、日頃私の考えていることを思いきり話して欲しいというリクエストを受けています。おそらく、私が『映画芸術』に連載している「菅孝行の戦後史」に今日の主催者の方が目をとめられて、このタイトルになったのではないかと思います。というわけで、今日は、「自分史」と戦後史を重ねながら、私がこれまで何をしてきたか、何を考えてきたか、今何を考えているかを軸にお話したいと思います。ちなみに「菅孝行の戦後史」は、『映画芸術』の第４６２号から毎号連載してきましたが、全１６回で２０２１年中に終わる予定です。

神道思想による「天皇代替わり」の儀式

今日は、「代替わり」の渦中の「改元」をタイトルにした集会なので、先ずそれに関連する事から話を始めましょう。天皇明仁が 2016 年に「生前退位」を求めて「代替わり」が行われることになり、2019 年に入ってから、国を挙げて一連の儀式が行われています。憲法が何ほどのものかということはありますが、「政教分離」の原則からの逸脱のオンパレードです。最近のことで言えば、今年の 11 月 14 日から 15 日にかけて、大嘗祭という極めつけの神道行事がありました。現在、私たちは、戦後憲法の民主主義の原則と、憲法第一章の「天皇制」条項や、それと一体の「皇室典範」との矛盾に直面しています。あのような儀式が仰々しく行われ、散々敬語つきで報道されると、この問題の意味するところを考えないわけにはいきません。

ただ、それは、この日本社会で多くの人々が日々どのような困難を抱えて生きている

かということに比べれば、人間の生死に大きく関わるような問題ではない。そういう意味では、天皇の「代替わり」など大したことではないが、その一方で、大切でないことが重要な意味を付与されてしまっているという二重性があります。この二重性こそ、国権を手放した戦後の「象徴天皇制」の日本国家の存在様式なのだと言えるかもしれません。

今年 2019 年 4 月 30 日に前の天皇が退位して、翌日の 5 月 1 日に新天皇が即位しました。そのときに行われたのが、「剣璽等承継の儀」です。これも、まぎれもない神道儀式ですから、本当は、現行憲法の「政教分離」の原則に反するものです。「剣璽等承継の儀」というのは、草薙剣（くさなぎのつるぎ)、八咫鏡（やたのかがみ)、八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）という「三種の神器（じんぎ)」を新しい天皇が受け継ぐことによって正式に天皇になるという即位儀礼です。これをしなくては天皇になれないというのは、神道思想です。そういう儀式が、公のものとして敗戦後も全く変わらずに継承されています。これが「合憲」だというのは、どう考えても無理があります。しかし、現行憲法の第一章で「天皇」を規定している以上、天皇それ自体は「合憲」的な存在ですが、「憲法違反」の神道儀式を行うことによって新天皇が正式に即位するという、大きな矛盾を抱えた統治のあり方の下で私たちは生きています。これは、戦前の皇室典範を大筋で継承することが容認されているために起きることです。

即位の通過儀礼は、「剣璽等承継の儀」のほかにもいくつもあります。三種の神器の継承の後にあるのが、「即位後朝見の儀」です。これは新天皇として国の代表に会う儀式です。今年の秋の 10 月 22 日に「即位礼正殿の儀」があり、その時に饗宴と祝賀御列・祝賀パレードが行われるはずでしたが、台風による水害で 11 月 10 日に延期されました。

大嘗祭という伝統の「捏造」

その後でまた「大嘗祭」がありますが、その「大嘗祭」が皇位継承のクライマックスです。「悠紀殿」と「主基殿」という、その儀式のためだけの建物が何十億円もかけて造られます。両方の建物で同じ儀式をしますが、その際にあらかじめ占いで「悠紀の田」と「主基の田」を選定します。東の「悠紀の田」と西の「主基の田」でそれぞれ稲を育てて、実ると「抜穂の儀」という儀式をやって、その米を「大嘗祭」に使います。

「大嘗祭」は古くからの日本の伝統だと言われていますが、中世の貧乏な天皇家では「大嘗祭」は行われず、歴史の上で長い断絶がありました。いつから天皇の即

位の際に必ず大嘗祭をやると決めたのかというと、明治維新の後なんですね。明治政府は、明治天皇の「大嘗祭」を明治４年に行って、一度は途絶えた慣習を近代になって復活させました。その後は、天皇の即位のたびに必ず行うよう法律で決めました。「大嘗祭」という一見古代的な儀式が皇位継承に絶対不可欠になったのは、実は近代なのです。もちろん、明治政府も、何も根拠がないものをでっち上げることはできません。「大嘗祭」の起源は天武朝とされています。残っていた「大嘗祭」の記録を手がかりに儀式を復活させたわけです。

当日の会場の様子

「大嘗祭」の儀式の意味は学者ごとにさまざま解釈があって、完全に特定されているわけではありません。民俗学者の折口信夫は、この儀式を通じて、天皇の先祖とされる天照大神から「天皇霊」を体の中に吹き込まれるのだ、と言っています。これが「悠紀殿」・「主基殿」の儀式の核心ですが、その後、祝宴があります。その際に、古い芸能を継承する各地の神社が歌舞音曲を奉納しますが、それらの奉納される芸能の多くは物語形式になっていて、天皇への服属の起源を表現したものも少なくない。たとえば、皆さんもよくご存じの海彦・山彦の物語は、隼人族の祖先の海彦が天皇の祖先の山彦に服属するようになったことを示すものですが、この物語を九州の隼人族の芸能として奉納するわけです。

清和天皇の即位の際の記録が残っていて、村井康彦という民俗学者が書いた本(芸能史研究会編『日本芸能史２』・第１章)の中に引用されています。これによると、非常に多くの数の芸能が奉納されていたことが分かります。その多くが「服属儀礼」であるという点も、忘れてはならないと思います。中世には途絶しましたが、天皇の即位の際にそうした儀式を行う時代があったことは、歴史的な事実です。明治新政府は、近代国家の天皇の権威を謳いあげるためにこの儀式を明治 4 年に復活させました。歴史家のエリック・ホブズボウムとテレンス・レンジャーの編著の『創られた伝統』という本がありますが、「伝統」とは近代に作られるものだということです。

ただ、今回と 30 年前の「天皇代替わり」との決定的な違いは、前天皇の明仁は生きているということです。だから、権力が服喪を強制したり、町内会が天皇の死去に伴う「自粛ムード」を蔓延させることはできませんでした。その一方で、別の深刻な問題がありました。

「生前退位」による代替わりを問う

「生前退位」が法的に可能になったのは、宮内庁が内閣府を差し置いて、2016年の8月8日に明仁が例の「お言葉」をNHKから放送したことから始まりました。日本政府は、天皇制という統治形態や日本の「敗戦処理」の再審に繋がらないように、極めて実務的な一回限りの「特例法」をつくりあげましたが、前天皇はそれが不満だと語ったと毎日新聞が報道しました。前回のような天皇の死去による「代替わり」に比べて抑圧感はかなり軽くなった反面、新天皇即位の「祝賀キャンペーン」は、前回以上に活発に繰り広げられたように思います。

私たちの税金がなぜこんなことに費やされなければならないのかとつくづく思いますが、現行憲法の中に天皇の地位が定められ、それに基づく現在の皇室典範という法律がある以上、政府がやれば住民はそれに否応なく付き合わされます。この天皇制がある限り、「代替わり」のたびにろくでもない「祝賀ムード」や「自粛モード」に巻き込まれてしまいます。不快なことですが、そう考える人間の政治的規定力が弱くて、そうではない人たちを説得できていないのは厳粛な事実です。憲法における天皇の地位は、主権者である「日本国民の総意に基く」ことになっていますので、本当に廃止しようと思うのならば、国会で決議させて国民投票にかけ、過半数を得ることができれば天皇制はなくなるわけです。逆に言うと、そうしない限り、私たちはこのような「空騒ぎ」にずっとつきあわされることになります。

「天皇代替わり」の一連の儀式は、天皇の権威をあまねく国民に浸透させようとするものであり、その頂点が即位に関わる儀式になるわけです。歴史的に日本の支配権力を権威づけるのが天皇の役割なので、権力は天皇の威を借りて自らの権力を国民に見せつけるために、そうした儀式を簡単に手放すことはありません。憲法の条文で「政教分離」の原則が定められている以上、本来、公金を神道思想に基づく「天皇代替わり」の儀式に投ずることは許されていません。「三種の神器」の継承という神道思想に基づく儀式を国事でやるのは、憲法上の「政教分離」の原則の「有名無実」化にほかなりません。政府は、公の部分と私事の部分をわけて、外国から来た国賓は、私事の儀式には参列しないようにして辻褄を合わせていますが、しょせん彌縫策でしかありません。

こういう二枚舌がまかり通れば、当然、抗議する人たちが出てきます。異論を持つ者はブラックリストに載せられて、事前に監視されたり、儀式の会場の周辺から排除されたりします。権力の側からすると、「天皇代替わり」は、戒厳令的状況を作った上で、神聖で尊いとされるものを守ることに同意する者とそうでない者を選別し、「お上」に刃向かう者を取り締まる格好の機会なのです。

「リベラル派」が天皇賛美者に

また、今回の「天皇代替わり」が非常に「オメデタイ行事」だという「幻想」が大多数の人々の間に深く浸透していて、それが天皇と天皇制に対する親近感となって現れることで、結果的に儀式を主催する日本政府への支持につながっています。長年、女性運動や「食」の問題、環境問題などに取り組んで「リベラル」な文化人と思われていた落合恵子でさえ、「生前退位」を決めた前の天皇や、台風被害を考慮して「即位パレード」を延期した新天皇への賛美・共感の思いを表明しています。現在、彼女のような「リベラル派」が大きく数を増やしています。その一方で、「天皇賛美」に違和感をもつ人間は、周囲から白い目で見られるようになります。

もう一つ注目すべきなのは、前天皇の明仁と安倍政権との間でかなり深刻な対立があったことです。アンチ・リベラルな支配権力の権威の「箔付け」の機能を担っている天皇が、「リベラル」な言動をするというのはねじれた現象ですが、明仁は、天皇制の永続のために憲法の「平和主義」・「民主主義」・「立憲主義」の原則を守るという強い意思をもっていました。それに対して、安倍政権側は、現在の憲法の解釈を変えたり、ゆくゆくは憲法の条文自体を変えて、武器輸出で商売したり、自衛隊を「国軍」にして戦闘地域に出動させたりするための「道具」として、天皇を利用したいと考えているわけです。それは、明仁にとっては許容し難いことです。

2016 年 8 月 8 日の例の「お言葉」は、ただ年を取ったから生前退位したいというのではなくて、こうした軋轢もあって出したものでしょう。「天皇語」というのはいつも韜晦されていますが、本当にこれでいいのか、国民よ、考えて欲しい、という含意は読み取れました。それを聞いて、いわゆるリベラル派や革新系の中にも、明仁の賛美者になった人たちがたくさん出てきました。

現行憲法では「天皇は国政の権能を有しない」ので、国政の権能を有するのは政府です。その政府を選ぶのは国会議員ですが、国会議員を選ぶのは他ならぬ主権者なので、政府と天皇が対立すれば、制度上、主権者に選ばれた議員がつくった政府が勝つに決まっているわけです。この会場に来ている皆さんは安倍政権を支持はしていないでしょうが、結局、主権者が選挙で選択をして政権が成立するという手続きが踏まれている以上、選挙のからくりがおかしいとしても、現在の政権への支持が主権者の意志ということになります。政権に逆らう天皇は政権に勝てませんので、そういう天皇に幻想を抱く主権者は、必ず裏切られます。そういう国家に私たちは身を置いています。悪しき権力は、いわば、主権者の「身から出た錆」なのです。ですから、反政府の側が天皇に期待をかけるのは、倒錯だと言うしかありません。

なし崩しに進む政治状況の悪化

本当にこの間の日本の政治は最悪ですが、それは、そういう政府をつくってきた主権者の政治意識の反映でもあります。2013 年 3 月に「武器輸出三原則」が閣議決定で空洞化された後、翌 14 年 4 月の閣議決定ではとうとう「武器輸出三原則」自体が撤廃されました。要するに、武器の生産・売買を日本企業は自由にやっていいということです。その他にも、第二次安倍政権は、特定秘密保護法（13 年 12 月成立）や安保法制（14 年 12 月成立）、共謀罪（17 年 6 月成立）を作り、2018 年 12 月から辺野古新基地建設のための埋め立て工事を強行しています。

また、トランプがアメリカ大統領になってからは、墜落事故続きの V － 22 オスプレイや F35A 戦闘機といった、一機 100 億円以上の非常に高価な武器を大量購入するようになっています。そうした動きは、改憲モードと相互補完的です。明文改憲はまだなされていませんが、集団的自衛権が閣議決定で「合憲」とされてしまった以上、現政権による明文改憲も大いにあり得るし、たとえ明文改憲されなくても、主権者の沽券は地に堕ちています。

今年の 11 月、多くの反対を押し切って、千葉の幕張メッセで国際武器見本市「OSEI Japan2019」が開催されました。国際武器見本市では、高付加価値の最新式の武器の商談が行われていますが、現在、日本企業は武器輸出を軸に新しいマーケットを開発しようというところにまできています。その一方で、今年 10 月に「日米貿易協定」が締結されましたが、これはどう見ても日本に一方的に不利で、アメリカだけに有利な不平等条約です。日本政府はこれが国益につながると言いますが、アメリカの「国益」に隷属することで利益を得る勢力のために制定されたのが、「日米貿易協定」だと言えます。企業減税の対象になって利益を得る企業も、「日米貿易協定」で利益を得る企業とほぼ重なっています。

こうした政策によって、現在、日本の大企業の内部留保は史上最高額に達しました。その一方で、21 世紀に入ってから日本の労働者の実質賃金は低落の一途をたどっています。今年 10 月から消費税が 10 %に上がりましたが、消費税は低所得者層を直撃します。賃金の下落と同時に労働者間の賃金格差が非常に激しくなっていて、貧困層の困窮の度合いもますます深まるという状況になっています。自国民の苦しみを尻目に、他国の支配権力を進んで受け入れることによって利益を得る者たちのことを「買弁資本」・「買弁勢力」と呼ぶわけですが、現在のこの国では本当に「買弁勢力」が我が物顔にふるまっています。現政権になってからは、そうした傾向がさらに顕著だと言えるでしょう。

政府の独裁が可能になった原因としては、内閣府がトップの官僚の人事権を全部掌握できるように法律を変えたことがとても大きいと思います。それによって、自民党内の反対派も安倍に対して何の文句も言えなくなっています。ましてや、野党のチェック機

能は壊滅的な状態です。その結果、「桜を見る会」では、安倍が税金を使って自分の支援者を接待するという違法行為を平気でやれてしまうわけです。まさに、「この世をばわが世とぞ思ふ　望月の欠けたることもなしと思へば」と豪語した、藤原道長の現代版ですね。�笑㈩

もちろん、戦後の歴代の自民党政権がさほど「まとも」だったわけではありません。もちろん、例外はあります。保守派の総理大臣は同じようなものだと言ってしまうと、石橋湛山は気の毒です。ただ石橋は総理大臣就任後、すぐに病気で倒れてしまい、東条内閣の閣僚だった岸信介がその後を襲うわけです。しかし、政治家のモラルという次元で見ると、岸や東条内閣と比べて現在の政権は同じようなレベルではないでしょうか。

ここまでひどい内閣の支持率が下がらないというのが、私には一番気になるところです。それは主権者の政治意識が最悪だからです。「桜を見る会」では内閣支持率がさすがに少しは下がったようですが、多数の人たちが、口を揃えて「嫌韓」や「嫌中」、「嫌朝」を唱えていて、「ネトウヨ言説」が全盛を極めています。こうした政治意識の蔓延が、政・官・財の癒着や、地域の政治・経済と権力の癒着の構造を生み出してしまいます。

不安を〈総動員〉に誘導する国家権力

今日の集いの主催者である「生・労働・運動ネット富山」の皆さんの大きなテーマとして、「『生の再生産』の領域をいかに支配権力との攻防の場にするか」ということがあると思います。現在、高齢者や障害者の虐待といった酷いニュースが、絶えずテレビから流れてきます。また、子どものいじめ・虐待致死も非常に深刻な状況で、学校での自死に至るいじめや家庭内での幼児虐待死が、可視化された範囲で言えば明らかに増えています。警察は極力見て見ぬふりをしますし、ひどいことになっているのに児童相談所や学校も全然やる気がない、ということがだんだんはっきりしてきています。

この間の日本社会の「劣化」は、単に政治が悪いというレベルを超えて、私たちがこの社会で生きることの根底を支えている「生の再生産」の領域自体が根底から損なわれてしまい、それを食い止めるための歯止めも社会の中にほとんどないというところにまで来ています。そうした問題が全て安倍の政治のせいだとは言い切れないかもしれませんが、安倍政権はこの間、一貫して社会保障・福祉の切り捨てを進めながら、そのように社会の根底が揺らいでいることへの人々の傷つきや不安を国家主義的な方向へ誘導することで、自らの権力を維持してきました。その後始末をどうするのかということが、今、私たちに問われているのではないでしょうか。

かつて、インターネットの普及によって一般の人たちと大手のメディアとの格差が解消されて、誰もが平等に情報の発信者になることができるということが、大きな希望や期待として語られていました。しかし、実際にはそれとは逆に、SNS で

発信されることの多くが、「生」のゆらぎが生み出す人々の不安感を社会的な「弱者」やマイノリティへの差別・敵対心へと転化するものになっているという状況があります。

国際政治も最悪な状態です。アメリカのトランプやロシアのプーチン、中国の習近平、トルコのエルドアン、また、それに最近イギリスのジョンソン首相も加わりましたが､本当にろくでもない連中が権力の座で我が物顔に威張り散らしています。ポピュリズムには、「左のポピュリズム」もないわけではありませんが、多くが右翼的です。現在、世界各地での戦争や内戦によって大量に生み出された難民が国境を越えて入ってくることに対して、受け入れ先の国では暴力的な排外主義が高まっています。日本は初めから難民を入れないのですから、排外主義の最先端とも言えます。そのような意味も含めて、軍事衝突への歯止めがない情勢が一世紀前に似てきたように思います。技術文明が進んでいる分、より苛酷で悲惨な状態になる可能性を否定できないのではないでしょうか。

「危機待望論」･「疎外革命論」との決別を！

マルクスが「資本論」で言っている「本源的蓄積」というのは、資本主義の成立に先立って、家畜を放牧したり、薪を拾ったりする民衆の共有地が略奪されることを意味します。それが一度きりで終わらないで、その後の資本主義の展開の中で形を変えて絶えず反復されてきました。そうした「本源的蓄積」によって成立した資本主義が、さらに高度化して社会的な矛盾が激化するときに民衆が蜂起して革命が起きるというのが、革命へ向かう古典的な公式でした。しかし、「本源的蓄積」が何度でも反復されて、資本家による収奪はどんどん進んでいるのに、そのことに対応して革命への機運が生み出されるという状況ではありません。

学校も人間の「生の再生産」の現場であるべき場所ですが、ここが長らく市場原理に席巻されて、実利一辺倒にゆがめられてきました。そのとどめを刺そうとするのが、文科省の「高・大連携」と「入試改革」でした。『サンデー毎日』から、去年と今年の 8 月に私に原稿のオファーがあったので、「大学入試改革」と「高・大連携」を批判する文章を書いた(特に 2018 年のものの方がそれに特化して書いています)のですが、その後、文部科学大臣の萩生田の失態のせいで暗礁に乗り上げました。まず、英語の大学入試センター試験への民間業者の導入が中止になり、国語と数学の記述式問題も取りやめになりました。未来を担う若者世代の教育の根幹に関わる部分を安倍政権と癒着した業者の利権のためにいじくって、「大学入試改革」に着手したのですが、あまりにも杜撰な手法だったために一旦は阻止されました。正直、少しほっとしています。

その他にも、私たちの重要なライフラインである水道を「民営化」してグローバル資本に売り渡そうという動きがありますし、また、海外の大手の保険会社を日本に参入させて医療サービスや医薬品の価格をつり上げることが可能になるような方向で、法律が「改正」されようとしています。今でさえひどい政治にさんざん苦しめられているのに、そういった人間の生命の根幹に関わる領域にまでグローバル資本が進出することになれば、私たちの抵抗の源泉が完全に絶たれてしまいます。それをどうするかということが、重大な課題であるように思います。

短いタイムスパンで簡単にできることではありませんが、昨年 10 月の「『米騒動』100 年プロジェクト」の集いで富山に来たときにもお話ししたように、権力や資本の「恫喝」に屈しない「隣人相互の信認に基づく関係」をいかに豊かに生み出すことができるかが、今の時代状況に相応しい〈希望の原理〉を創り出そうとする際の核心であるように思います。

ともすれば、堕ちるところまで堕ちれば展望が開けるということを言う人たちがよくいますが、それは、状況が行き着くところまで行き着いて困窮が極まれば、民衆は自然に立ち上がるだろうという「危機待望論」であり、通俗弁証法です。もしも本当にこれ以上生活が底をついたら、支配権力に立ち向かう気力さえも失われてしまうでしょう。その一方で、疎外革命論があります。「どこかに素晴らしい真実があって、それを手に入れさえすれば一挙にこの世界は変わるはずなのに、そこから疎外されているから見つけることができない」という論議です。私からすれば、そんな風に一挙に問題解決を可能にするような真実を鷲づかみにするなどという幻想は捨てて、ポチポチ探り当てるしかないんじゃないか、と思います。

そのような危機待望論や疎外革命論といった「幻想」は、さっさと取り払った方がいい。どちらもある種の「形而上学」で、証明は絶対に不可能です。これはある意味で、無宗教の人間のための信仰ですね。希望に向かう実践のための仮説を生み出すことは、そういった疑似宗教にすがらなくても可能なはずです。それを創り出そうというのが、今日、私を富山に迎えてくれた「生・労働・運動ネット富山」の皆さんが目指してきたことではないでしょうか。〈資本による労働力の組織化や国家によるナショナルな統合を、隣人相互の信認が生み出す関係性で打破する〉ということです。言うは易しで、簡単にできるわけではありませんが、しかし、そこに希望を見出さなければほかにはどこにもない、ということだろうと思います。

戦後日本国家に埋め込まれた「対米従属構造」

それでは、次に、日本の社会がなぜここまで地に堕ちたか、ということを考えてみたいと思います。それは、つまり、戦後日本国家の起源に何があったのかという

問題でもありますし、十五年戦争とは何であったのか、という問題とも重なります。十五年戦争には複合的な性格があります。一つは、遅れて帝国主義列強の一翼となった国家として、「植民地解放戦争」、つまり抗日戦争を制圧しようとしたという側面です。その帰着点の特筆すべきところは、敗戦国だけでなく戦勝国も植民地を失ったことにあります。もう一つは、帝国主義列強相互の覇権争奪戦争という側面です。それは、主に対米戦争として戦われました。すでに前者の中国による抗日戦争に消耗していたところに、後者が重なりました。しかし、日本の敗戦時に日本を占領したのは中国ではなく、米国だったので、当時もそうですが、今でも日本人は、中国人民ではなく、米国の軍事力に負けたと思っているわけです。

一方、米国側も自国が日本に対する唯一の「勝者」だと思っていますので、米国政府は占領統治の専権を掌握し、象徴天皇制と民主主義の共存という、日本人が抜け出そうとしても抜け出せない、矛盾に満ちた「メビウスの輪」のような政治システムを日本に与えました。加藤哲郎さんの『象徴天皇制の起源』によると、すでに1942 年に、米国国務省は知日派の知識人を使って天皇を軸にした日本占領政策を立案していましたが、ほぼその骨格通りに戦後の日本の占領統治は進められました。米国による日本の占領統治の大義名分は、日本の「民主化」でした。旧憲法下の統治形態と日本軍を解体し、国民主権・基本的人権の尊重・男女平等に基づく戦後憲法を制定させ、農地改革、労働改革、政治改革といった民主化政策を日本政府に実施させる、ということです。ただし、その意図は単なる民主化ではなく、米国の国益の長期にわたる確保に資するように、日本を第二次大戦後の東アジアの国際秩序の中に位置づけることでした。

その一環として、米国は、国民を主権者とした新憲法に象徴天皇制の規程を入れて敗戦後の日本に天皇制を残しました。天皇崇拝を占領統治に使うためです。また、昭和天皇が発した「沖縄メッセージ」や天皇の「ダレス引見」などにも現れているように、米国は天皇の力も借りて日本を東アジアの反共の砦にして、日本国内で米軍基地を自由に使えるようにしました。対日占領政策を円滑に進めるには、日本の国力を早く復興させなければなりませんので、日本の経済復興、つまり日本資本主義の再生を支援しました。アメリカの占領目的に抵触しない範囲であれば、アメリカは日本の旧支配層の延命を認めました。戦後の日本経済の「民主化」の当初の軸は「財閥解体」でしたが、それは結局、日本の経済復興と矛盾しない範囲に留められ、新しい独占資本の形成に向けてレールが敷かれました。

そうした戦後日本の欺瞞的な「民主化」の核心は、戦前と同様に天皇という名の君主がいることです。日本の支配権力に天皇という権威を付与し、その政府に米国の政策を執行させたのです。天皇と天皇制はアメリカに延命させてもらった以上、それに報いる態度を取り続けることになります。こうして「永続的従属」の構造が、

戦後の日本の政治構造の中に強固に組み込まれてしまいました。もちろん、「永続的従属」とは言っても、「独立」後、日本は米国の占領統治を脱したので、日米間のいざこざは当然たくさんあるわけですが、基本的に従属的な対米関係の中で日本は着実に経済発展を遂げました。日本の経済発展の目覚ましさは、一時「ジャパン・アズ・ ナンバーワン」と、米国の社会学者のエズラ・ヴォーゲルが呼んだほどになりました。

「右」と「左」から象徴天皇制の欺瞞を撃つ

司法・立法・行政という三権の〈外〉に「象徴」としてこれらに超越する天皇が立ち、さらにその〈外〉に天皇を延命させたアメリカがある、という「入れ籠」というか、メビウスの輪というか、敗戦後の対米関係が根深く組み込まれているのが戦後の日本国家や日本社会であり、日本経済なのです。それは当初、アメリカの日本占領政策として構想されたものですが、その「因果」が戦後 70 数年経った今でもめぐってきている、ということではないかと思います。もしも、ずっとアメリカの覇権が弱体化せず、日本の経済成長が続いていれば、こうした「永続的従属」の構造は露呈せずに済んだのかもしれませんが、もう誤魔化しようがありません。

そうした政治構造の形成の際に、天皇裕仁の果たした邪悪な役割は極めて重大でした。裕仁とその側近たちは、米国の日本占領政策の一環としての天皇制存続という構想が提示されるとそれにすぐに飛びつきました。「国体護持」さえ叶えばあとは何でもいい、ということです。皮肉なことですが、そのことに早い時期に気がついていたのは、極右の国粋主義者で天皇主義者の三島由紀夫でした。私は昨年、そのことをテーマとして『三島由紀夫と天皇』（平凡社新書）を書いたのですが、そのことにほとんどの左翼が気づかなかったというのは、本当に残念なことです。

例外は一人います。亀井文夫という映画作家がいますが、彼の監督した『日本の悲劇』（1946 年）というドキュメンタリー映画があります。その映画は、敗戦直後ということもあって、映像の素材は乏しくて、新聞の切り抜きや静止画像ばかりで構成されています。映像としては全然美しくありません。しかし、その映像の中に、一つだけ素晴らしいショットがあります。軍服姿の裕仁の映像がすっとオーバーラップすると背広姿の天皇になり、それがマッカーサーと並んで立つ写真に変わるのです。本当にこのワンカットのためだけに存在するような映画です。

その映画は米国の占領政策に抵触するという理由で GHQ によって公開が禁止され、映画のネガフィルム自体がズタズタにされてしまいます。ところがそのポジフィルムを持っている人がいて、現在、そこから復元した映像の DVD を見ることができます。亀井文夫は戦前のプロ・キノ運動に関わっていたのですが、逮捕されて

「転向」を強要されます。その後、陸軍の宣伝映画『上海』(1938 年)、『戦ふ兵隊』（1939 年）という「戦意高揚映画」を監督します。ところが、『戦ふ兵隊』は闘わない兵隊を活写していましたので、当局の逆鱗に触れて上映禁止になりました。その後、彼は、治安維持法で逮捕されていますが、表面上、「転向」はしてもなかなか二枚腰・三枚腰の人です。

「左」の亀井文夫に対して「右」には三島由紀夫がいるわけですが、三島の友人に、『級友三島由紀夫』（99 年・中公文庫）という回想録を書いた三谷信という人がいます。彼によれば、裕仁がマッカーサーと会見している新聞写真を見て、「なぜ衣冠束帯じゃないんだ」と三島が言ったそうです。おそらく三島は、敗戦後の「象徴天皇制」は、かつての「鬼畜米英」に天皇自身が媚びへつらってつくってもらったものだ、ということに早くから気がついていたのだと思います。そのことに気がついてしまったものだから、三島由紀夫にとって戦後の日本社会は居心地が悪くて仕方がない。彼のすべての文学作品の創作の主要なモチーフは、そこにあったのではないか。私が書いた『三島由紀夫と天皇』は、この仮説で彼の主要な作品と言動を読み切ってみようという試みでした。

戦後日本国家の起源には、そうした「永続的従属」の構造が抜きがたく埋め込まれてしまっています。そうした構造を精算できなかった負債が、戦後 70 数年の間にとてつもなく膨大に膨れ上がってしまっている。それをいかにできるだけ短い時間で精算することができるかということが、現在の私たちの大きな課題としてある、と思っています。私は今 80 歳ですから、私の生きている内には無理でしょうが、若い人たちにそうした課題をいかに継承するかということが、私のような年長の者に残された使命というか、役割ではないかと思います。

政治的「対米従属」と経済的「帝国主義段階」の併存

戦後 70 数年の間には、いろいろなことがありました。私自身も、歴史の節目となる出来事にいくつも遭遇しました。私が出会った最初の大きな出来事は 1960 年の「日米安保条約改定」をめぐる大衆闘争です。新安保条約は国会で批准されてしまいましたが、巨大な反対闘争が闘われたことは間違いありません。この敗北は、日本の運動にとって一つの「分れ道」でした。

共産党は、日米安保条約の改定によって対米従属がさらに深まり、米国による植民地主義的な支配がさらに強化されるので、米国を主要敵として「反米愛国」で闘おうということで、階級的な分析を全く抜きにして米国の「半植民地」的支配下にある日本が「宗主国」の米国と闘う、という構図で反安保闘争を位置づけました。一方、当時のブント（共産主義者同盟）など新左翼の側は、既に日本の資本制は帝

国主義段階まで自立・復活したのだから、「自国帝国主義打倒」を掲げて反安保闘争を闘うべきであり、反米愛国路線は間違いだと主張しました。

ブントが言うように、当時、日本資本主義は経済指標のデータで見る限り、確かに復活していました。この点で共産党は間違っていました。しかし経済的に日本が自立・復活しても、政治的軍事的に米国の「核の傘」に入ることで、「自発的」な対米従属路線を選択し続けます。そのように、当時の日本は、経済的には高度に発達した資本主義国家となりながら、米国と覇権を争う帝国主義国家ではありませんでした。これは、もちろん現在だから言えることですが、当時の新左翼の日米関係のとらえかたは一面的でした。

だからといって、新左翼の登場は歴史的に無意味だったということではありません。全学連を学生大衆の部隊としてブントが政治過程に登場したことで、日本の共産主義運動は大きく変わりました。そのことによって、共産主義運動は、日本共産党やその「本家」のソ連共産党を唯一の中心とするものではないことを大衆的に明らかにしました。これは、一種の「コペルニクス的転回」です。しかし、世界情勢や日本の政治構造の認識において、共産党を凌駕できたわけではありません。当時の日本の新左翼運動については、そういう両面を見る必要があると思います。

日本の近代と戦後民主化の再審

そこから先は、今日お集まりの皆さんにとっても同時代のことです。共産党だけが「前衛」ではないということが明らかになった後でも、共産党は、相変わらず、「いや、私たちだけが『前衛』だ。それ以外はトロツキストであり、帝国主義の手先か、ニセ左翼だ」と、言い続けています。それに対して、日本の新左翼は、共産党と対峙しながら、幾つもの潮流に分岐が進みます。

一つは、スターリンによるソ連一国社会主義化と「大粛清」を超えて、マルクス・レーニン主義に基づいて日本共産党に代わる唯一の「前衛党」を建設しよう、という路線を掲げる潮流です。そうした潮流としては、革共同中核派や第二次ブント（共産主義者同盟）などがあります。また共産主義革命の党派を名乗りながらも、必ずしも前衛は一つでなくてもいいはずだ、と留保する潮流も出てきます。また、前衛主義を否定して、無党派で闘う市民運動的潮流も新たに登場しました。

そうした新左翼の様々な潮流は、〈68〉年の運動では、国会前での攻防に焦点を置いた 60 年安保闘争とは大きく異なる形で、様々な政治的・社会的な闘争を激しく展開しました。しかし、残念ながら、〈68〉年の運動もまた、戦後日本の政治構造がどのようなものであり、それが米国との関係でどのように形成されてきたかについて、的確に捉えることができませんでした。その点は、この運動の限界と言え

るかもしれません。

しかし、〈68〉年の運動が切り開いた地平があることも忘れてはなりません。1960年の安保闘争の頃までは、旧左翼も新左翼も、近代化や科学技術の進歩を全面的に肯定していましたし、戦後の「民主化」に深い疑いを向けたりはしませんでした。日本の運動が、戦後民主主義には疑わしいところがあり、明治以降の日本の近代化の軌跡自体を問い直す必要がある、というところにまで思想的に深化できたのは、ベトナム反戦運動や全共闘運動、70年安保闘争があったからだと思います。また、近代への懐疑は、科学技術への懐疑や生産力への懐疑へと結びつき、核科学への信仰に終止符を打つことへと繋がったと思います。

〈68〉年の闘いの画期性のひとつは、無党派の運動があっていいのだということを、実践を通じて明らかにしたことだと思います。共産党でも、ブントでも、革共同でも、革労協でも何でもなくても運動はやれる、ということを身を以て経験したことは、当時の学生たちに間違いなく大きな解放感を与えました。日大全共闘が典型でしょう。もちろん、日大に党派はほぼ全て入り込んでいました。しかし、学生大衆全体の意識は、党派の論理とは違って硬直したところがなくて、非常に自己肯定的でした。日大で学生運動をしていた人たちは、「俺たちは『自己肯定』だったよ」と言っていますが、それは当然のことです。

当時の日大の学生たちの側には、「自己否定」する契機は何もありませんでした。古田会頭が巨額な政治献金などを通じて政権と癒着してあくどいことをしているから叩きつぶせ、というのが、日大全共闘の運動の根幹だったわけです。日大の大衆団交には学生たちの親まで来ました。一方、東大のようなエリート大学の学生の場合は、体制側に荷担することになる自分のあり方に含羞があるから、「自己否定」と言わざるを得ない。そのように、このまま大学システムのレールに乗っているとまずいことになるぞという直観が、東大全共闘の運動の契機になっています。東大全共闘と日大全共闘という全く違った運動が、街頭や学園で遭遇して共に権力と闘うという希有な事態が起きたということでしょう。

自らの「特権性」を否定した戦前の活動家たち

「自己否定」というのは、その当時に限ったことではなくて、たとえば、戦前の知識人層の中には、上流階級の出身者で「極左」になったという人たちが何人もいます。当時それを「プロレタリアートへの階級移行」と言ったそうです。たとえば、私のよく知っている演劇の世界のことで言えば、戦前の演劇人に土方与志という人がいますが、彼は伯爵です。結局、彼は爵位を剥奪されてしまうのですが、伯爵家の財産をつぎ込んで築地小劇場を作りました。また、国際的に活躍した戦前の有名

な演劇人として佐野碩（さの・せき）がいますが、この人は後藤新平の孫です。彼は､戦前の鎖国的な日本の演劇運動の中で国境を越えて活躍したほぼ唯一の人です。

佐野は、日本プロレタリア演劇同盟（プロット）から派遣されて土方与志夫妻とともに 1933 年にソ連に入国したのですが、帰国すると逮捕されてしまうので日本に戻ることができませんでした。彼は、ソ連では世界的な演出家のメイエルホリドが主催する国立劇場でメイエルホリド自身から指導を受けたのですが、スターリンの「大粛清」によってソ連から追放された後、メキシコに渡ってそこでメキシコ近代演劇を創出します。なお、佐野は、後藤新平の養女だった母親を通じて、戦後のリベラル派の文化人・評論家として有名な鶴見俊輔の従兄弟でもあります。彼の伯父さんが「転向声明」で有名な佐野学です。佐野学も「転向」するまでは、支配階級からのドロップ・アウト組です。

理化学研究所（理研）の 3 代目所長で、理研産業団の創始者である大河内正敏子爵の長男に、大河内信威（おおこうち・のぶたけ）という人がいます。大河内は、小川信一のペンネームで戦前の左翼の演劇運動に深く関わりました。彼は、日本プロレタリア文化連盟（コップ）の書記長になると同時に、日本プロレタリア演劇同盟（プロット）のメンバーとしても活躍しました。30 年代の左翼演劇運動が崩壊してしまった後、彼は主に左翼運動の弾圧に対する救援活動を行っていました。当時の左翼演劇の活動家たちは､大河内家や後藤家の屋敷で秘密の会合をもつことが、しばしばあったようです。

また、演劇とは関係ないのですが、私が高校まで通った学習院からドロップ・アウトした人で、1932 年に結成された唯物論研究会に松原正というペンネームで理論家として活躍した菅豁太という人がいます。彼の名前が、戦前の学習院の卒業生名簿の中にありました。彼は私の姓と同じ漢字ですが、読み方はスガですので別に親戚ではありません。もっと注目すべきは、岩倉靖子でしょう。彼女は、明治維新の元勲の岩倉具視の曾孫です。彼女は戦前の非合法時代の共産党のシンパとして活動して、1933 年に逮捕されました。最後まで非転向を貫こうとしましたが、彼女が肉親として唯一人心を許していた兄が自分のために貴族社会の中で責めさいなまれていることを知り、肉親の情と運動との間で板挟みになって、「転向」を表明します。保釈後、彼女は、同志を裏切った「落とし前」として自決しています。彼女が共産主義に惹かれた背景には、貴族階級の腐敗が許せないという強い思いがありました。

このように、自らの出自や特権的な位置に対する「自己否定」というのは、東大全共闘だけのものではなく、戦前の活動家たちの少なからざる人々が、まさに「清水の舞台から飛び降りる」覚悟で運動をしていました。

戦後史の欺瞞――戦争責任問題という陥穽

1968 年前後の年は、日本もそうですが、アメリカやフランス、ドイツ、それにチェコ・スロヴァキア、中国も含めて、動機やきっかけは違っていても、全世界で同時多発的に大騒乱が起きて、反権力闘争が繰り広げられた時代でした。しかし、先ほども言いましたように、そうした時代状況の中にあっても、日本の場合、運動の核心をなす理論や思想の洞察力が、戦後日本国家の統治形態の深層に迫ることができなかった。また、これに匹敵する大きな問題として、戦前の日本国家の侵略戦争に対する歴史的な責任の自覚や、アジアへの植民地支配に対する批判を運動の側がきちんと行えなかったということがあります。そうした問題が、1970 年の「七・七華青闘告発」で厳しく問われることになりました。

1969 年 3 月に在日中国人の若者たちによって結成された華僑青年闘争委員会（華青闘）は、出入国管理法制定阻止闘争を軸に活動していましたが、翌 1970 年 7 月 7 日に予定されていた「七・七盧溝橋 33 周年・日帝のアジア再侵略阻止人民大集会」の実行委員会の事務局の人選に中核派が介入したことで、華青闘は同実行委員会を脱退しました。そして、華青闘のメンバーは、「七・七大集会」の会場で新左翼の政治党派の独善的な体質を批判するとともに、日本人は過去の植民地支配や侵略戦争を全然反省していない、「革命家」を自称するお前たち自身がアジアへの侵略者ではないのか、という内容の非常に厳しい告発を行いました。

そのように、日本の〈外〉に向けての帝国日本の侵略戦争への批判・反省の不徹底と、日本の〈内〉に向けての戦後日本国家の統治形態の分析の不徹底という 2 つの問題は、日本の〈68〉年の運動の「アキレス腱」だったのではないか、と思います。

新左翼の政治党派は、「七・七華青闘告発」の衝撃によって大きな混乱に陥りましたが、その批判をきちんと受け止めて自分たちの運動のあり方を変えるのではなく、それを盾に取って、対立する他の政治党派や党内闘争の反対勢力を制圧するための告発の論理にするという、非常にゆがんだ方向に進んでしまいました。私は、華青闘の批判を最大限真摯に受け止めて、ストレートに日本国家や企業と対峙しようとしたのは、日本の運動では「東アジア反日武装戦線」だけではなかったか、と思っています。彼らは、殺してはならない人たちを殺していますから、決して手放しで認めているわけではありませんが、帝国主義国家日本の国家犯罪と向き合おうとしたことや、戦前の支配構造が戦後も形を変えて延命していることへの直観は、他の政治党派にはないものだったと思います。

戦前の日本の侵略戦争に対する批判・反省の不徹底の問題と、戦後日本国家の統治形態の真相に充分に迫ることができていないという問題を突き詰めて行けば、当

然、天皇制の問題に行き着かざるを得ないわけです。ですから、未遂に終わりましたが、「東アジア反日武装戦線」のメンバーたちは、74 年に那須御用邸から東京に戻る途中の昭和天皇を荒川鉄橋上で列車ごと爆破・殺害するという「虹作戦」を決行しようとしました。鉄橋を爆破するための爆発物をそのまま都心のビル街で使ったらどうなるか分かるはずだろうと思うのですが、彼らは、その後、三菱重工本社ビルの爆破でその時の爆発物を使って、多数の死傷者を出してしまいます。

彼らは大失敗をしたわけですが、「七・七華青闘告発」を日本人として真剣に受け止めて、それを政治闘争に反映させた政治的な潮流が、ほかにはなかったということは極めて深刻です。

Ⅱ.「自分史」としての「戦後史」をたどる――60年安保／「不連続線」／反天皇制運動

陸軍幹部軍人の家に生まれる

それでは次に、私自身が「戦後」の時間の中で何をしてきたのかを軸にお話しします。私は軍人の家に生まれました。私の父は、日本の敗戦時に陸軍中将で兵器行政本部長という役職にありました。前任者は木村兵太郎という陸軍大将で、極東軍事裁判で A 級戦犯として絞首刑になった人です。父のその前の役職は兵器局長でした。

父は、陸軍からの派遣学生として東大の工学部造兵学科を出て、若い頃は兵器を設計する技師でした。卒業して辞表を出したけれども、軍から認められなかったと聞いています。軍人は、上官が認めない限り辞職することができず、職業の自由はなかったということです。本当は、そのまま大学院に進学して研究者になるのが、父の夢だったようです。私にとっては良い父親でした。彼は、おそらく天皇が神だとかいったことは、ほんのひとかけらも信じたことはないでしょう。

父個人としての人間性はともかく、過去にそういった役職を担ったわけですから、段々物心ついてくると、これはまずいと思うようになります。子どもの頃は、例えば、私の中学 1 年生の時の 1952 年 5 月の「血のメーデー」について、父の言う通り、「アカが騒いでけしからん」と本気で思っていました。しかし、高校 1 年生ぐらいになると、そうはいかなくなっていきます。私の通っていた学習院では、毎年 4 月 29 日に天皇誕生日の式典を行っていましたが、自分はどうも変な学校にいるらしい、と少しずつ気がつき始めます。

今では研究棟や教室が並んでいますが、当時、目白の学習院の構内に大きな広場があって、式典がある時にはそこに児童・生徒・学生が集められました。初等科の

私は、正面に向かって広場の右端に並んでいましたが、左側には上級生が並び、その中には皇太子明仁だの弟の義宮だのがいたわけです。著名な哲学者で戦前一高の校長だった安倍能成(あべよししげ)が院長訓話を毎年やりました。学習院はいかに皇室と深い関係にある学校かという話で、ツマラナカッタです。

演劇青年　安保後に政治に〈目覚める〉

幸か不幸か、高二の頃に私の父の経営していた会社の経営が傾いて、もう私学の学費が出せないから、国立大学の東大を受験しろと言われました。東大の文学部でよければ受けるという取引をして、学習院を抜け出したわけです。文科二類、今の三類です。幸いにも合格できたおかげで、親に出してもらう学費は十分の一以下になりました。現在であれば、旧国立大であっても入学金のない平年度でも学費が年間 50 万円以上だと思いますが、当時の国立大の学費は 1 年間で 9 千円で、受験料は 500 円、入学金は 1000 円でした。今の 50 分の 1 以下です。下手に学費を値上げをすると、学生の反対運動が起きるので、大学側もそれを恐れて安く抑えていたようです。国立大の学費が急上昇するのは、学生運動が停滞期に入った後からでした。

学費が安いのと、東大生は家庭教師のアルバイト代が高いので、これでひとりでも食っていけるなと思い、「お世話になりました」と両親に仁義を切って家を出て一人暮らしをしようとしたのですが、「無理に出て行かなくてもいいよ」と言われると、そのほうが楽に決まっていますので、結局易きについて、卒業するまで家から大学に通いました。大学を卒業して就職したときに、京都に配属されたので自然に家を出る形になって、それ以後は実家で暮らすことはなくなりました。

大学院に進学して学者になることも考えましたが、よほど優秀で奨学金をもらえるのなら話は別ですが、別に自分にとって悪い親父ではないけれども、22 歳にもなると父親の来歴が分かっていますので、親がかりで家に居続けるのは憚(はばか)られました。それで学者になるのは止めて、東映と東宝の求人に応募して合格しましたが、東宝は映画部門の求人ではありませんでした。当時、映画の演出助手の求人は東映と日活だけでしたが、東宝で菊田一夫の大衆演劇の助手になることと、東映でチャンバラやアクション映画の製作の下働きをすることとを両天秤にかけて、東映を選びました。

私は、学生時代の前半は全然政治青年ではなく、60 年安保闘争までノンポリで、大学ではずっと演劇をやっていました。ですから、1960 年 6 月 15 日には私は安保反対デモの隊列の中にいましたが、それは全学連主流派の隊列ではなく、「安保阻止新劇人会議」の隊列でした。実は、60 年の 4 月から私は大学とのダブルスク

ールで俳優座養成所に通っていて、そこからデモに出かけたわけですが、そのデモは劇作家の福田善之さんが指揮していました。そこに右翼が襲撃してきたので、右翼を野放しにする警察に抗議するという趣旨で、新劇人会議のデモ隊は、右翼の襲撃の後、夕方には警視庁を包囲していました。

その時にサイレンが鳴り響いていて、どうも国会周辺で何かあったようだとは感じていたのですが、その後で全学連のデモ隊にいた樺美智子さんが亡くなったことを知りました。政治への「目覚め」はそれがきっかけです。そのように政治的には非常に奥手な演劇青年でしたが、その翌日から私は全学連のデモに日参することになります。その後、反安保デモは鎮静していきますが、一旦「目覚めて」しまったものですから、己が身の始末がつかなくて、数千人単位から一挙に三桁減って数十人のデモになっても、意に介せずにデモに出かけるようになりました。俳優座養成所も、25 倍の競争率を突破して入所したのですが、あまりもったいないと思わずに退所しました。俳優座系の演劇は〈向こう側〉、つまり旧左翼側のものだから、新しい演劇は自分たちの手で創り出さなくてはならないと考えて、その年の夏から東大劇研に戻って学生演劇を続けました。

1961 年の大学 4 年生の夏に、私は崩壊してしまった第一次ブントの大衆団体だった社会主義学生同盟の再建に関わりました。その年の春は、東大の本郷キャンパスから「サークル動員」でデモに出られる学内サークルは劇研だけという状態でしたので、古くから残っていた活動家に珍しがられて、政治的には新参者でも「サークル動員」の元締めだったので、気兼ねなくデカイツラで運動に関わっていました。しかし、せっかく当面は党派形成をせずに大衆運動の再建に努めるという申し合わせをしていたのに、主な運動家の人たちが皆それを破ってしまって、62 年からは党派づくりに専念し始めます。これは違うなと思ったので、内定を二つ取っていましたので、就職の方へ舵を切る決断をしました。

映画産業の端境期に組合役員になる

私が、商業演劇ではなくて映画を選んだのは、1960 年頃から、「松竹ヌーベルヴォーグ」という日本映画の新しい潮流が映画監督の大島渚や吉田喜重、篠田正浩らを中心に登場してきていて、その刺激を受けていたからでもありました。映画会社の中にいてもこんな作品が作れるのかという、一筋の希望を得た思いでした。東映に入ったら現代劇のヤクザ映画とか刑事ものをやれるのではないかと思っていましたが、1962 年 7 月に、時代劇の京都撮影所の方に配属されました。そこで演出助手の 3 K労働の現場に就きます。　　1964 年の初めに、私の一年先輩の演出助手の人が東映の京都支部の書記長をしていました。ところが、当時はまだ青年層の結

核が「国民病」だった時代で、その人が結核で休職になったのですが、補填は同じ職場からということで後釜の書記長の補欠選挙に私が推薦されて、信任投票で書記長になってしまいました。当時、私はまだ 24 歳です。職場の労働組合に出るなんて考えてもいなかったので、カミさんとの結婚式の日程も決めてしまったところでした。

それまでの東映の労働組合は、会社側と「平和条項」のある協約を結んでいて、穏健でした。しかし、ちょうどその頃から映画産業が「斜陽」になり、東映の労務担当者が組合に攻撃的な態度を取るようになってきて、組合が会社を批判すると、何かにつけて、それは階級闘争至上主義だとかいった攻撃を加えてくるようになりました。それに対して組合側も急速に性格を変えつつあったのですが、そこに私が目立つ形で入っていったということです。私は 64 年の 5 月に結婚しましたが、カミさんは新劇女優でしたから、とりあえず東西で別居するしかありませんでした。

その年に東京撮影所の海外ロケの人員が大幅に削減されるという問題があって、労使の対立が激化しました。渡航するスタッフのパスポートの扱いが就業規則に反したとかいう理由で、東京撮影所の支部委員長が解雇されました。それ以降、解雇撤回闘争に心血を注がざるを得なくなります。その上、補欠選挙で書記長になってからまだ 8 ヶ月で任期が来てしまったので、もう一期組合役員をやるということになりました。今度は本部の組合の副委員長なので、私は東京在住になり、カミさんのアパートに入り込ませてもらいました。

その間に東映の労働組合が分裂工作にあって、京都支部の例で言いますと、それまで組合員が 800 人以上いたのに、本社の労務の指示に従う第二組合に 200 人、現場第一主義の第三組合に 500 人が移って、元々の第一組合のメンバーは 100 人足らずになりました。結局、私は、自分で自分に「指名スト」を打ったりしながら、組合活動をやっていました。指名ストをしますと、基本給 2 万円程度の実質の月給が 1500 円になった月もあり、カミさんと生まれたばかりの子どもを実家に帰してしのぎました。

京都からの脱出後『バンパイヤ』の助監督に

そのような状況の中で、東映では劇映画部門を削減してテレビなどの部門に移す組織改革がありました。そうした配置転換には当然、報復人事が伴いますので、私のような組合活動で目立った者たちは、劇映画の製作現場から放り出されてしまいます。結局、劇映画の監督になるという夢は、三年で潰え去りました。当時の東映の労働組合には、共産党や民青の人たちが結構いました。京都ではそうした人たちは東京よりは少なかったのですが、共産党系の人たちとの組合内での議論は絶えま

せんでした。

1964 年に 4・17 ストライキというのを総評が計画して、それに共産党が反対したために中止になったのですが、その時は支持か反対か、当日の集会に行くか行かないかで執行部内で激論になりました。私はストライキに行こうと主張したのですが、それに対して「あれは挑発だから行くな」と民青の人が言って、大もめになりました。結局、ストライキは中止になったので行くも行かないもなくなりましたが、京都では、「あなたの考えはトロツキズムだ」とか言われながら、それなりに仲良くしていました。東京撮影所では、もっと対立がきつかったようです。

2 年目の任期が終わって私の配転された先は、京都制作所といって、CM や企業の PR 映画などを作る部署でした。皆さんの中に、「うず潮」というナショナル(今のパナソニック)の洗濯機のコマーシャルを覚えている方もいるかと思います。私はそのコマーシャルを作ることに関わりましたが、そのほかにもいくつかナショナルの製品の CM を作りました。また、広島大学の慢性気管支炎の患者さんの問診用の映像とか、大阪市大の医学部の中耳炎治療の教材の手術の映像なども製作しました。飯塚増一さんという「警視庁シリーズ」の常連の監督だった人が製作する住友商事のＰＲ映画の助手や、ハウスプリンの CM で博報堂のディレクターのアシスタントをしたこともあります。その間、京都府営住宅に当選するまで、カミさんと娘は東京、私は会社の寮という別居状態でした。

仕事の先行きの展望はないし、劇場用映画部門への復帰はまずありえない。これ以上の長居は無用と思いつつも、労組側に悪影響が出ないように慎重に少しずつ時間をかけて、67 年 4 月に東映を辞めて東京に出ました。次の仕事先は、手塚治虫の「虫プロ」の子会社の虫プロ商事というところでした。手塚治虫原作の「バンパイア」というテレビ映画です。その演出助手をしないかということで、脚色の勧進元をしていた福田善之さんに誘われて入社しました。監督は当初、元 TBS の真船禎さんと元新東宝の山田健さんでした。

ちなみに、その時の主演俳優が、今、刑事物のドラマシリーズの「相棒」で活躍している水谷豊で、彼は当時中学三年生でした。その番組は、長野の山奥の出身の主人公の少年が都会に出て差別的な扱いを受けたりして激怒すると、狼に変身するというストーリーでした。主人公が狼になる場面では、実写からアニメに変わるのです。部落解放同盟から、人と獣の間の存在という設定は差別に当たるのではないか、と抗議を受けたりしたようです。

今ならアニメと実写の合成は簡単にできますが、当時は「エアリアル合成」という手法で、実写フィルムの上にマークして一コマずつ手描きで絵を描く、という手間のかかる技法でした。それでお金と時間がかかって予算オーバーになり、26 話中 18 ～ 20 話辺りのところで、番組の製作が大映のテレビ部に身売りされて、私

は職を失いました。67 年 4 月からその仕事を始めたのに、翌年の始め頃にはもうクビになって路頭に迷うことになってしまい、それ以降の糧道はほぼ完全なフリーランスでした。その仕事をしたのは私が 28 歳の時ですが、『バンパイア』はかなり長く再放送されていて、番組製作スタッフは私のような助手でも画面に名前が出るので、『バンパイア』の助監督の菅孝行というのはあなたのことかい、と 40 歳くらいになっても聞かれたことがあります。

〈68〉年の「後の祭り」の後始末に関わる

1967 年からの激動期は、私は子どもを二人抱えてとにかく食うのに精一杯でしたので、運動に関わる時間を取ることができなかったし、深入りすると食えなくなるので、自分から進んでデモに出かけるということはほぼありませんでした。ですから、60 年代末の社会叛乱の最前線にはほとんどノータッチに近い状態でした。ただ、それでも、大きな家に住んでいる知人に党派の首領格の人間を匿ってもらうように斡旋したり、「大切なもの」といわれた包みを預かったりするといった程度には運動の裾野にいました。

その頃、映画界も激動期でした。斜陽産業の最後のあがきです。私が遭遇した人員削減や組織改革もそうですが、会社が突然監督を解雇するということも起こりました。日活では、鈴木清順監督が堀久作社長にクビを切られましたが、どうも彼の映画作品が分かりにくいというのが、解雇の理由のようでした。それに対して、鈴木清順問題共闘会議という契約解除の撤回を求める運動が起こります。私は、そのデモや集会には何度か行きました。監督は有期契約なので、もちろん、契約労働者の契約が慣習的に更新される「期待権」というものはありますが、それを法廷に持ち込んでも、日本の法律ではなかなか勝つのは難しいのです。ですから、それは、初めから、この出来事を契機に映画や映画産業、映画製作者の労働などについて議論しようということを、運動の隠れた目的とするものだったのかもしれません。

どうも私は、仕事でも運動でも、全盛期を過ぎた場に関わるという傾向があります。60 年の安保闘争の昂揚期が過ぎてから学生運動を齧（かじ）り、62 年に絶頂期を過ぎた映画産業に入り、〈68〉年の社会的激動にも昂揚期を過ぎてから運動と色々な関わりをもち、さらにもっと後々のことを言いますと、絶頂期を過ぎた予備校の講師を長く続ける、といった具合です。

〈68〉年の動乱の退潮期の最悪のシンボルの一つが、「連合赤軍事件」です。同志殺しが露顕してから後、マスコミは激しいネガティブ・キャンペーンを繰り広げました。しかし、左翼のはしくれとしては、この不始末を黙殺するわけにはいかないということで、そうした意思を共有する人たちが何人か世話人になり、救援運動

の活動家たちと「連合赤軍公判対策委員会」という団体を結成します。そこには、ベ平連や埼玉市民連合の運動家で浦和市議だった小沢遼子さんや、東京女子大学の近・現代史の教員で先日亡くなった松沢哲成さん、ルポライターでジャーナリストの穂坂久仁雄さん、第一次ブントのメンバーだった故・蔵田計成さん、私の東映時代の同期で当時の NET(10 チャンネル)の演出部に出向した渋谷正行さんやその同僚の味岡亨さん、といった人たちがメンバーとして参加して、「連合赤軍事件」という「後の祭り」の後始末に一緒に関わることになりました。渋谷・味岡の両氏は、臨時雇用者の解雇を黙殺する組合の方針に反対して除名されると同時に、ユニオンショップ（全員加盟制）の組合だったので自分たちも解雇されてしまって、自らの解雇撤回闘争のさなかでもありました。

劇団俳優座の〈造反〉への加担

少し時間をさかのぼって、私と演劇との関わりを話します。私は、学生時代に 60 年代の新しい演劇運動の「火付け役」になったというプライドはありましたが、東映で 5 年ほど会社勤めをしている間に、「アングラ演劇運動」が始まったので、演劇の世界では、出戻りの新参者扱いになってしまいました。1963 年の「状況劇場」の結成を起点に、「早稲田小劇場」、「演劇集団変身」、「自由劇場」、「六月劇場」、「天井桟敷」などが次々に旗揚げして、新劇ではない演劇を創りだす活動を始めていました。

私が戯曲を書いたのは、学生時代に福田善之さんと共作した『ブルースをうたえ』を別にすると、69 年に上演した『ヴァカンス』が最初でした。福田善之さんが特別劇団員をしていた青年芸術劇場（青芸）という劇団があって、そこに芝居の台本を書く約束をしていたのですが、就職してからはずっと書けずにいて、退職後にやっと台本を書き上げた時には、青芸は解散してしまっていました。そのようなわけで、『ヴァカンス』は、69 年に上演委員会といういわば「寄り合い」方式で上演されたのですが、岡村春彦という青芸のリーダーだった人が演出をしました。その時には、一週間で三千人位の人たちが見にきてくれました。これが、私ができた 60 年代演劇への最初の「介入」でした。

次は、俳優座の内部の〈造反〉への関与でした。戦後の新劇運動を牽引してきた俳優座内で、60 年代末に、「俳優座反安保六月闘争委員会（六闘委）」というグループが結成されて、社会問題にコミットするとともに、俳優座内部で劇団批判の声を上げました。中村敦夫、加村赳雄、市原悦子、原田芳雄、菅貫太郎、鶴田忍などの俳優たちや、制作部の中軸にいた塩見哲、増田啓輔などといった人たちが中心でした。

この造反の背景は入り組んでいました。俳優座には劇団内に日本共産党の「細胞」があって、党の文化政策に従って活動していました。この人たちは、反新劇の前衛主義的演劇には激しい反発を抱いていました。共産党グループは、リクツはどうあれ観客が入らなければダメだという劇団内の保守的傾向と折り合いがよく、こうした勢力が劇団内で優位を占めるようになります。これと闘ったのが千田是也や安部公房、田中千禾夫といった人々であり、六闘委の中心メンバーは、元はといえば彼らを支える「千田チルドレン」だったのです。しかし、「造反有理」の波が劇団に及ぶと、劇団の権威主義に反対する声は広い層から上がるようになります。それまで劇団幹部が決めていた上演演目を劇団員の投票で決めるようになったのは、こうした造反の勝ち取った「成果」だったのだろうと思います。

千田是也さんは、劇団の改革には賛成だっただろうし、前衛的な演目の上演にも反対ではなかったのでしょうが、同時に彼は、劇団の代表的人格でした。反千田派も、劇団の総帥の地位から彼を引きずり降ろそうとはしなかったのです。結果として、千田さんは、自分の意に染まない方針の劇団の最高責任者の立場であり続けました。それが、千田チルドレンによる、千田是也を頂点に据えた劇団体制への造反というねじれた事態を生んだのでした。

『はんらん狂騒曲』の上演

六闘委は、上演演目の民主的決定という次元では満足しませんでした。眼目は劇団の芸術上の理念の変革ですが、演目への介入をその突破口にしようとしたのでしょう。前に言ったように、わずか四ヶ月ですが、私は俳優座養成所十二期生で中村や加村とは旧知の仲でした。彼らから私に白羽の矢が立って、「俳優座の上演候補の台本を書かないか」と誘われて、『はんらん狂騒曲』という戯曲を書きました。フランス革命の第二革命を企てて、断頭台に送られたバブーフを主題に据えた粗っぽい乱反射型の脚本です。上演演目の決定のための総会で、新作戯曲四本が投票にかけられて、別役実の『そよそよ族の反乱』と、清水邦夫の『狂人なおもて往生をとぐ』は賛成多数で上演が決定しましたが、私の書いた『はんらん狂騒曲』(『新劇』71年８月号掲載、のち『現代日本戯曲体系 8』に収録）と、内田栄一が書いた、ジャリの『ユビュ王』のパロディ『吠え王オホーツク』は反対多数で落選しました。

出来の悪い台本でしたが、千田是也さんは、その前衛気質から主題と様式にはそそられたところもあった模様（『千田是也演劇論集』七巻、あとがき）で、書き直して形を整えたら劇団として上演してもよい、と中村や加村に言ったようです。しかし、結局、私は、改稿の要求を受け入れませんでした。もしも、千田さんから直接言われたとしても、改稿は望まなかったでしょう。私は、千田さんとは重大な思

想的非和解があったからです。

千田さんの批判は、その戯曲の世界が不条理劇的だという点にありました。当時、ベケットと並ぶ不条理劇の大作家ウジェーヌ・イヨネスコが、アメリカの財団の支援で反共活動に挺身していたことも彼の気に障ったのでしょう。千田是也さんという人は、前衛芸術に造詣も深く、感度も敏感な人でしたが、あくまでもロシア革命の時代の子でした。合理主義と歴史の発展に対する信頼の深さが、半端ではなかったのです。一方、不条理劇の思想は、合理主義と歴史の進歩に対する根源的な懐疑の表明です。革命の歴史的必然を信仰することなどできないというのが、60 年代的精神の基調であり、そういう意味では革命劇も不条理劇だったのです。

『はんらん狂騒曲』が上演演目から落選して間もなく、中村たちは俳優座劇場を押さえて、その自主公演を行うことを決めました。中村と私は、自主公演に勧誘できそうな外部の役者と交渉して回りました。駆け足でいろんな人たちに会って参加をお願いしました。『はんらん狂騒曲』の自主上演では、山谷初男など一部プロの俳優も参加しましたが、セミプロやアマチュア小劇団の劇団員の他、演劇に未経験の学生までいました。また、俳優座の劇団員も、何人か端役で参加しました。そのように、期間限定の自主公演運動に参加する 100 人を超える大集団ができ上がりました。『はんらん狂騒曲』は、中村敦夫・加村赳雄の演出で、1971 年 7 月 28 日から 8 日間上演されましたが、連日満員で、一日だけ日本青年館を借りて 8 月 7 日に追加公演をしました。集客数は、合計で 6 千人を超えたと思います。

演劇集団「不連続線」の七年間

その後、六闘委の中心メンバーは俳優座を辞めましたが、劇団は作りませんでした。私も、彼らと組むという関係にはなりませんでした。彼らはもうひとかどのプロであり、こちらは、「持たざる者の演劇」、つまり技芸を持たないまま、持たない者が何をどこまでやれるのかを試みようとしていたのですから、一緒にやるのは無理でした。奇しくも、1972 年 2 月 28 日の「浅間山荘事件」の起きた日が、「不連続線」という名の私たちの演劇集団の結成の日でした。その後、「不連続線」は、1978 年末までの間に、9 回公演して、そのうち 6 回は無謀にも旅興行をしました。その 7 年間で回った都市は、青森、弘前、仙台、山形、秋田、福島、郡山、宇都宮、水戸、甲府、長岡、新潟、柏崎、富山、長野、松本、高岡、金沢、福井、京都、吹田、大阪、岡山、三島、浜松、豊橋、名古屋などです。

しかし、「持たざる者の演劇」で集団を持続させるというのは、かなり無謀な試みです。演劇というのは、観客に芸術的な刺激を与えることで初めて成立するわけですから、それには一定の演劇的なスキルが必要です。スキルがないままで芝居を

やって成功するということは、1 回だけの上演であれば、大いにあり得ますが、それは偶然ですから、持続は不可能です。そういう無理をあえてやることにしたわけです。一部の人たちからの支持は受けても、どうしても継続的に注目されることはなくなっていきますが、それは集団の内部に不満が蓄積する原因になります。

私の方では、スキルがなくても役者には観客の気持ちに訴える力を自分で見出して磨いていくべきだという思いがありますし、その一方で、役者たちの側は、観客の心をどうしたら動かせるかを考えるのは集団のリーダーである私の役割だと思っていますので、当然、齟齬が出てきます。逆に言えば、そういう集団がよくぞ満 7 年間も続いたものだ、とも思いますが。1978 年の暮れに行った公演の後、「不連続線」を続けるかどうかの決定権を私が持つことにさせてもらって、「休眠状態」にし、事実上、それが解散となりました。

「演劇史」的に言えば、自分たちは 60 年代演劇の「負け組」です。しかし、その遺産が、何も残らなかったわけではありません。実は、私は、「不連続線」の旅興行で富山にも来たことがありますし、高岡にも金沢にも行ったことがあります。金沢での「不連続線」の上演の支援者として映画の仕事をしていた志村秀人さんという人がいて、彼とは今でも長い付き合いが続いています。彼は、私が話をした去年の 10 月の富山の集会にも来てくれました。そのように、日本の各地でいろんな人たちと出会うことができて、それは私にとって結構面白い経験でした。

また、頭脳警察というロックバンドがあって、リードヴォーカルだったパンタはいまも音楽活動を続けています。頭脳警察は、「不連続線」で上演した芝居の音楽を作曲してくれたのですが、彼らの作った『Music for 不連続線』というタイトルの CD は、今でもどこかで手に入ると思います。

日本の「アングラ演劇運動」の軌跡

自分史を離れて、60 年代の演劇史の動向に少し触れておきます。さっき少し触れましたが、従来の新劇と一線を画する新しい演劇を生み出す運動が、60 年代に澎湃（ほうはい）として沸き起こりました。そうした新しい演劇運動の性格は、近代の規範への懐疑という点で、全共闘運動や、他のジャンルの芸術運動とも共通性をもつものです。

その後、60 年代の新しい演劇運動は、いくつかの流れに分岐しながら現在に至っています。その中の一つが、演出家の鈴木忠志をリーダーとして、富山の山奥の利賀を活動拠点にしている「SCOT」です。彼らが最初、利賀に来た頃は、白石加代子が輝いていましたが、今は、集団全体が非常に充実しています。60 年代にこれと対抗して出てきたのが､赤テントの興行で新しい観客を生み出した唐十郎の｢状

況劇場」です。「状況劇場」では、麿赤児や李麗仙、四谷シモン、大久保鷹、藤原マキといった役者の存在そのもののプレゼンスで観客を惹きつける俳優たちが、唐を囲んでいました。今は、唐十郎が身体を壊してしまって、演出も俳優もできなくなっていますが、彼の「哲学」は唐組や唐ゼミという形で残っています。

もう一つの基軸は、「黒テント」です。彼らは、運動の演劇を標榜して、テントで全国巡演を続けました。「黒テント」の演出家には、佐藤信や山元清多、加藤直などがいましたし、文芸部的な理論家グループには、津野海太郎や佐伯隆幸、ディヴィッド・グッドマン、藤本和子などがいて、『同時代演劇』誌上で論陣を張りました。また、「黒テント」の主な俳優としては、斎藤晴彦や新井純、村松克己などがいました。

その他、寺山修司が、詩人の「豪腕」で組織していた「天井桟敷」があります。寺山の死後は、「天井桟敷」の芝居用の音楽を創作していた作曲家の J・A・シーザーが、その暖簾を継いでいます。また、60 年代の社会叛乱の担い手の若者の信条に同伴することをモチーフに集団性を維持してきた「現代人劇場」や、その解散後に結成された「桜社」という演劇集団がありました。その俳優たちは、60 年代の社会闘争の一員の自覚を持った若者でした。しかし、「現代人劇場」の劇作家の清水邦夫や演出家の蜷川幸雄といった人たちは、共に出自は新劇でした。その後、蜷川幸雄は商業演劇の世界で大活躍するようになり、清水邦夫は「木冬社」をつくって、既成の新劇の世界に近いところに活動の場を移しました。

60 年代演劇の支流として、過激な「持たざる者の演劇」の成功例と言っていいのかどうか分かりませんが、日本のアジア侵略や天皇制の問題をテーマに演劇活動を行った「曲馬館」というテント演劇集団がありました。「曲馬館」自体は数年で解散してしまいましたが、解散後、そのメンバーが続けてきた演劇活動として、翠羅臼（すいらうす）の「ルナパーク・ミラージュ」、桜井大造の「風の旅団」や「野戦の月」、桃山邑たちの「水族館劇場」などがあります。その他、今でも 60 年代演劇を批判的に引き継ごうとする系譜として、今年 10 月に富山の氷見でも公演を行った「劇団ドクンゴ」というグループがあります。

反新劇の 60 年代演劇が登場してから、すでに 60 年近く経っています。もう歴史的な総括の対象です。私は以前、鈴木忠志が静岡芸術劇場の芸術総監督をしていた時に、7 年間そのスタッフとして籍を置いていました。そこで「世界演劇」として通用するレベルの演劇に触れることで、独自の舞台造形の方法や俳優訓練のメソッドをもっていることや、自身の表現に不可欠な固有な演劇集団や劇場があることが、世界に通じる演出家としての技量を発揮するための条件であることを改めて認識しました。技芸の蓄積は、そういう演出家が存在していて初めて保証されます。プロの演劇は、こうした基準で評価される以外にはないでしょう。

その一方で、技芸の蓄積とは無縁の、持たざる者の「地を這う演劇」があります。たとえば、フランスの哲学者のサルトルが言及した、占領下のパリで上演されたフランスの劇作家のジャン・アヌイの『アンチゴーヌ』や、スーザン・ソンタグが 93 年 8 月に内戦下のサラエヴォで上演したサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』は、そうした演劇の実例です。全然、位相は違いますが、敗戦直後の日本での労働運動の一環としての職場演劇の数々や、私たちの世代が 60 年前後に経験した学生演劇なども、そうした演劇として挙げてもいいでしょう。

さらに、持たざる者の「地を這う演劇」には、これらとはまた違う演劇の領域もあります。たとえば、障害者や「在日」の人たちの演劇や、これから日本でも増える外国人が自身の存在をテーマとするような、「マイノリティ」による演劇活動は、重要な意味をもつものです。そうした演劇とハイアートの演劇との両方がないといけないのではないかというのが、その両方に触れた者としての直観です。

80年代の反天皇制運動に関わる

私の自分史に戻りますと、1980 年以降、演劇運動の「現場」から撤退してからは、PR 映画とか CM を主な糧道としながら、物書きをしていました。そうした状態になってからは、私は、文章を書くことそれ自体が運動だと考えてきました。文章を書くということは批評であり、批評は働きかけであり、働きかけは運動だからです。この場合、運動とは、認識や関係の自明性を変えることを目的として他者に働きかける言動です。それを自らの思想を表明・表現することを通じて実践するのが思想運動であり、演劇論として実践するのが演劇運動だということでしょう。

私は、吉本隆明論、竹内好論、鶴見俊輔論などや、戦後の日本の知識人・思想家に関する評論を書いたり、近代及び戦後の思想史や歴史論を書いたりしました。また、演劇運動の「現場」では敗北しましたので、その「後始末」を何とかつけたいということで書いた演劇論もいくつかあります。その合間に文学論も一つ本にしました。

それから、私は、「身体」とは何を指す概念なのか、思惟するのは「私」の意識なのか、からだなのか、というテーマにこだわりました。それは、一方では、観念の「上空飛翔」に対する批判という意味があり、他方では、「演劇のことばは、体が書く言葉だ」という発見を理論化しておきたい、という意図もありました。思惟の上空飛翔に対する批判は近代批判の重要課題ですが、近代を克服するはずの革命理論が上滑りして抽象としての党の絶対化を生み、絶対化ができないイデオロギー相互の「内ゲバ」を必然化する、と考えていました。そのような意味で、私の身体論は、同時に党派性批判論でもありました。

先ほど言いましたように、私は、「連合赤軍事件」の被告の公判対策に関わりましたが、「東アジア反日武装戦線」の救援活動には直接は関わりませんでした。ただ、その救援対策をしてきた人の依頼を受けて、「東アジア反日武装戦線」による連続企業爆破事件や「虹作戦」をどう考えるかというテーマで文章を書きましたが、そのことを通じて三里塚闘争や破防法裁判とも多少接点ができました。また、私は、核兵器禁止運動の原発肯定が理解できない、という発言を比較的早い時期にしたと記憶しています。解放同盟との組織的な接点はありませんでしたが、部落解放運動の活動家との出会いから、差別問題に関わる文章も書きました。天皇制への入り口の一つは、部落と天皇の問題、もうひとつは、象徴天皇制という統治形態への関心でした。

私の書いた『天皇論ノート』のモチーフは、第一に、戦後の天皇という権力を持たない権威が統治にどのような機能を発揮するのか、ということであり、第二は、人々の内面に編み込まれた天皇に対する意識が当時頻発した「子殺し」と切り離し難い関係があるのではないか、という仮説でした。第三は、戦後の天皇制の統治は、日本の資本制の再発展とどのように繋がっているのか、ということでした。
そのように、私が次第に天皇制の問題に関わっていく中で、日本での差別意識・差別構造は、どうしても天皇制的なヒエラルキーとつながっていると考えざるを得なくなり、天皇制と差別の問題をセットで考えるようになりました。その過程で 1989 年の天皇の「代替わり」に遭遇することになります。

二つの「代替わり」の違い

1989 年は、GHQ に戦争責任を免責された裕仁の臨終から明仁の即位へ向かおうとするときだったので、この間の明仁の退位による「代替わり」とはまったく様相が違っていました。当時まだ戦争を直接体験している人たちが多くいて、裕仁が大日本帝国の頂点に立って開戦を布告し、戦争終結にも当たった君主という記憶が共有されていましたから、一方で、畏敬の念も強かったのでしょうが、アジアへの侵略戦争と植民地支配の責任の当事者である天皇ヒロヒトをこのまま黙って死なせるわけにはいかないという批判意識に訴えることで、反天皇制運動ができました。当時、刑事弾圧や警察の尾行・盗聴など、面倒なことはたくさんありましたが、運動の論理を立てるのは比較的簡単でした。

ところが、先ほども言いましたように、今回は、天皇制永続を目ざしてであれ、天皇が護憲の立場に立ち、政府が改憲志向という構図です。「護憲天皇」に共感を寄せている革新系の人もたくさんいます。そのような天皇が生前退位することに反対だというのは、とてもアピールしにくいことです。昭和天皇の時とは違って、天

皇個人の悪と天皇制という制度の悪を同時に串刺しにできません。たとえ、天皇が善人だろうと制度が悪いということは、制度を承認している主権者の幻想を問う「思想闘争」です。ですから、1989 年の時の反天皇制運動を今さら繰り返しても、その時の縮小再生産にしかならない、と私は考えてきました。それではどうするのか。簡単に言うと、次のようなことです。

たとえば、「障害者は生きている値打ちがない」と言って、障害者を 19 人殺した植松聖という青年がいます。彼があのような行為をしなくても済むような、人と人との間を支える「受け皿」をこの日本社会の中につくることができれば、それができたその分だけ、天皇制イデオロギーの呪縛は解かれるはずだ、ということです。天皇制に反対するということは、別に天皇個人の人格をあげつらうことではありません。

もちろん、天皇制は日本社会の差別的な構造を生みだす根源だということや、アジアへの「侵略戦争の責任」や「植民地支配責任」といった問題は、私たちとしては、当然、知っていなければならないことです。しかし、そういう知識を啓蒙すれば天皇制はなくなる、ということではないはずです。このような統治の下にある社会とは異なる人間相互のつながりが豊かに生み出されることが、天皇への畏敬や親和の感情から人々を解き放つのであって、それができなければ天皇制は無くならない、と私は考えています。つまり、これは国家権力とナショナリズムの問題で、どこの国家でも不可避のテーマですが、日本ではそれが天皇制問題として現出しているということです。

予備校　偶然が生んだアジール

私が 80 年代前半に天皇制問題に関わったせいで、CM や PR といった企業系の映像の仕事がすっかりなくなってしまいました。また、その頃は、『現代の眼』や『流動』といった、私にとって原稿料が支払われる仕事の源泉だった出版社が、商法改正で潰された時期でもありました。さらに、天皇制問題プロパーの書き手のようになってしまったために、それまでたまには依頼のあった雑誌類の仕事もなくなりました。このままでは食えなくなるし、社会的にも死ぬと思ったので、知人を介して予備校の講師をしている人物に窮状を訴えて、講師の職の仲介をして貰い、何とか河合塾の小論文の講師に滑り込みました。それが 1987 年のことです。2015 年 3 月に河合塾をクビになりましたが、その時はすでに私は 75 歳でしたので、さすがにその年齢では、あまり文句を言おうと思いませんでした。

80 年代の予備校は、多士済々でした。当時の予備校には、土師政雄や吉川勇一、小田実、最首悟、山本義隆といった、歴代の運動家で大学に職を得られないか、得

る気がないインテリが多数いました。その下のもっと若い世代の予備校の講師には、今以上に学術振興基金の制度が不備なので、予備校講師のアルバイトをしないと生活費も研究費も賄えない研究者の卵がたくさんいました。バブル経済が生んだ高学歴の高等遊民ですね。河合塾も例外ではありませんでした。予備校生にも個性的な若者たちがたくさんいたのですが、そうした雰囲気を生徒の親も認めていて、当時の予備校はいわば一種の「梁山泊」のような感じがあって、とても面白かったのです。歴史の偶然が生み出したアジールですね。もちろん、予備校の講師といっても玉石混淆で、ただの食いっぱぐれや詐欺師まがいの人たちも、少なからずいました。予備校の講師には特に資格が要求されないのですから、それはある意味で当然です。もしも年齢制限があったり、大学院の修士出とかいった資格が求められていたりしたら、私はそこに入れなかったでしょう。

1990 年に、国連の「平和維持活動」への自衛隊の参加を可能にするための PKO 法案が国会に上程されました。その時に、無党派で行った最初の「PKO 法反対デモ」は、予備校生によるものでした。そのデモを計画したのは予備校の講師でしたが、その人はいくつもの運動を潜ってきた古強者です。そのデモの参加者は、500 人はいました。その内、河合塾の生徒が 7 割でしょうか。あとの大半は、駿台予備校と代ゼミの生徒たちです。

渋谷駅そばの宮下公園は、再開発で今はもう集会に使えなくなってしまいましたが、その「PKO 法反対デモ」では、宮下公園に集合した後、公園通りを通って渋谷の街を一回りしました。その時は、一度 PKO 法案が廃案になったので、大いに昂揚しました。次の年の初めに受験を控えた予備校生が、12 月にデモをしたわけです。よく来たなと思います。

その翌年の 91 年の 5 月に、再上程された PKO 法案に反対するデモをしましたが、この時には約 800 人の予備校生と予備校の講師が参加しました。なかなかすごいことでした。ただ、そのようなデモがあると、中核派とか革マル派とか、政治党派が「オルグ」に来てしまうのです。私たちにはそれを完全に排除する力量がないので、次の年からは怪しいのが来られないように、やり方を変えました。集会の場は、早稲田の日本キリスト教団の会議室にして、デモは高田馬場駅近くの公園までの短い距離にしました。その会議室には最大でも 200 人ぐらいしか入れませんが、そこなら最大の難物の党派が入ってこないし、それと対立する党派も遠慮するという意味で、絶好の場所でした。その後も、小規模ながら、予備校講師と生徒の反戦集会やデモを 1995 年の「敗戦 50 年」の時まで続けました。そうしたアクションを「デモはもう古い」、「今はパレードの時代だ」とか言っている人たちが主宰したがっていたので、運営を委ねたら潰れてしまいました。痛恨です。

また、当時、大手の予備校では、受験とは直結しないような講演会をよく行って

いました。駿台予備校や代ゼミでは、予備校の事務局が企画して穏健派や右派の話し手が講演しました。一方、河合塾の場合は、予備校講師が企画して色々な講演者を呼びました。その中でも出色は、当時の駐日パレスチナ総代表部のバキル・アブドゥル・モネイムさんでしょう。その時は、何人かの河合塾の講師が共同で企画して中東地域研究家の板垣雄三さんを介してモネイムさんに来てもらい、河合塾の横浜校で講演会を行ったのですが、会場の周りを公安が取り巻く物々しい雰囲気になりました。予備校の生徒たちも好奇心が旺盛で、中には二時間近くかけて千葉校から来た生徒もいました。モネイムさんの講演の後の議論も活発で、結構面白い場になっていました。

私がお呼びした講演者としては、今ざっと思い出すだけでも、20 世紀中は、田中克彦、浅井基文、由井晶子、江原由美子、小森陽一、池田浩士、『青年の誕生』を書いたばかりの木村直恵、村木良彦、如月小春、平田オリザといった人たちがいました。今世紀に入ってからは、藤田進、杉村昌昭、李孝徳、中西昭雄、東チモール独立をテーマに故・越田清和、自治省幹部で「地方分権推進委員会」の事務局次長で後に富山県知事になった石井隆一、山口二郎、酒井隆史、島薗進、水野和夫、大澤真幸、崔洋一といった人たちがいました。当時の予備校生の知的貪欲さも半端ではなかったのですが、それには講演者たちの多くが驚いていました。そうした知的貪婪さは、その後、予備校生たちが大学生になり、社会に出ると、どうなってしまうのでしょうか。

2000年代からの歩み

2000 年代に入ってから私が何をしてきたのか、少しお話ししておきます。ひとつは「変革のアソシエ」ですが、この団体は、2019 年に解散しました。そこでの講座運動は、大阪労働学校アソシエの東京の拠点として残っていますが、私はそこには直接は関係していません。

1990 年代に『季刊クライシス』という運動誌が終刊したときに、「フォーラム 90」という思想運動団体が作られました。さらに、その解散後、共労党の元議長で思想家のいいだももさんや、情況出版の古賀暹（のぼる）さん、御茶の水書房の橋本さんなどが中心となって、「アソシエ 21」という団体を結成しました。その解散後、2009 年 6 月に結成されたのが「変革のアソシエ」です。そこでは、団体と同じ名前の『変革のアソシエ』という季刊の運動理論誌を出していました。その最大のスポンサーだったのが、「関西生コン労組」でした。組合員の学習教材としてかなりの部数を買い上げてくれて、それで財政が支えられていました。「変革のアソシエ」の活動のもう一つの柱が講座で、私は 2010 年ごろから 2015 年まで、天皇制問題

の講座の講師をやっていました。また、私は、『変革のアソシエ』誌の企画・編集にも関わり、最後の編集長を 9 号分、2 年余り勤めました。

2015 年 12 月に「関生労組結成 50 年」を記念して、新しい組合本部ビルであると同時に労働者や地域住民との交流の場として、大阪市内に「学働館・関生」が建てられました。さらに、そこを組合活動家の養成や理論活動の拠点にしようということで、翌 16 年 4 月からそこに「大阪労働学校・アソシエ」が併設され、「変革のアソシエ」の活動もその中に統合されました。その直後から、「関西生コン労組」に対する、権力の熾烈な弾圧が始まって現在に至っていますが、状況は今でも油断を許しません。東京での「変革のアソシエ」の講座は、「アソシエ東京」と改名し、内容も一新されて現在も運営されています。

また、私は、現在、「ルネサンス研究所」という、ほとんどお金をかけずに運営している緩やかな盟約の思想運動団体のメンバーです。立ち上げの計画には途中からの参加なので、伝聞ですが、発足の経緯を言いますと、2009 年に左翼系の幾つかの出版社が、議論を起こして若い書き手を育成しようということで、そのための組織の結成を模索し始めたのだそうです。しかし、議論が進まず、あきらめかけたときに、神戸大学の市田良彦（現代思想専攻）さんがマニフェストの草案を出して、これで行こうと呼びかけて、同意したメンバーで動き出したということです。私も含めて、その「マニフェスト」に賛同した者たちが「設立発起人」となりました。

2010 年 12 月に、「ルネサンス研究所が提起するもの」というシンポジウムを開き、「ルネサンス研究所」がスタートしました。そのシンポジウムでは、設立発起人のなかで、旧左翼系の川上徹さん（同時代社、元共産党系全学連委員長）、ラテンアメリカの民衆運動との連帯活動で知られる太田昌国さん（元現代企画室編集長）、マニフェストの起草者の市田良彦さんが「問題提起」を行った後、それを受けて討論を行いました。その時の司会は、元ブント系の活動家で情況出版の創設者の古賀暹さんでした。

その後、「ルネサンス研究所」が少しずつ活動をし始めた矢先に「3・11」があって、原発問題のシンポジウムを主催したり共催したりしましたが、しばらくは日常活動が停滞しました。2012 年から、ようやく腰を据えて活動を再開するようになりました。「ルネサンス研究所」は全国組織なのですが、現実には、東西二中心で、活動しています。関西は、「反貧困ネットワーク・関西」の事務所が拠点になっています。関東は、いろいろ紆余曲折しましたが、運動と繋がった活動拠点がないので、毎回会場を借りてやっています。おもに発起人の方に勤め先の大学の教室を会場として確保してもらって、月に 1 回のペースで研究会を開催しています。テーマは、大雑把に、世界、日本、資本主義に区分して、左翼運動の再生と活性化を模索する討論を進めています。

以上、私の「自分史」をお話しましたが、私自身も「生・労働・運動ネット富山」の皆さんが目指している地点と似たようなところに行き着いているのではないか、と感じています。「分け登る麓の道は多けれど　同じ高嶺の月を見るかな」とでもいうところでしょうか。

今後の闘いの大きな「目標」へ

今、日本社会の根底が大きく損なわれています。それをどうするかを抜きにして、反天皇制とか反安保体制とかいうどころではありません。この社会の根底を支える「生の再生産」領域が完全にボロボロにされているので、人々の相互の関係や「居場所」を大事にしてつくりなおすことができなければ、新たな社会構想を実現するための「拠点」を生み出すこともできません。そのような非常に危機的な状況に、現在、私たちは直面していると思います。そのことにどこからどのように着手するかが、今こそ強く問われています。テーマは、〈生命の再生産過程のヘゲモニーの掌握〉ということでしょう。あるいは、〈隣人相互の信認を基礎に、生の再生産領域での自治・自律を生み出すことができるか〉と言ってもいいでしょう。天皇制をどう始末するかということも、その中でしか解けません。

この国には、1950 年代の反戦運動や、50 年代後半の砂川闘争、1960 年の安保・三池の闘争、また、ベトナム反戦運動や全共闘運動の闘いがあり、そして、その経験は思想化されて人と人との間に根づいていたはずなのに、なぜこうなってしまったのかについて、最後に一言だけ言って今日の私の話を終えたいと思います。

その大きな原因は、80 年代の国鉄分割民営化を梃子にした労働戦線の解体攻撃だと、私は考えています。中曽根は国鉄分割民営化によって国鉄の労働運動を破壊し、これに依拠していた官公労、官公労に依拠していた総評労働運動を解体させました。これは単に日教組・全逓・全電通・自治労・水道などの官公労の労働運動だけではなく、これらの労組の運動を通じて地域の中に根付いていた地区労の足腰も破壊しました。残ったのは、会社の生産性の向上に全面的に協力して、その「分け前」を求める民間大企業の正社員の労働運動でした。これが 1989 年の総評解散後の連合の結成の意味することです。そうした階級的な労働運動に対する支配の側の攻撃の背景には、産業構造の情報化・ソフト化という資本主義の基本的な性格の大きな転換がありました。この激変を労働運動の側が正しく捉えることができなかったことが、運動の敗北の要因の一つだと思います。そして、この国では、「アジール」も「陣地」もその多くが失われてしまいました。

偶然ですが、総評解散と「昭和」の天皇代替わりは、同じ 1989 年です。この 89 年という年は、60 年安保から現在までの約 60 年間の内の、ほぼ半分の「折り返し

地点」とでも言うべきものでした。それ以降、怒濤の勢いで押し寄せて来る支配の側の攻撃に対して、運動側が対抗するための〈希望の原理〉を創り出すことが、まだできていません。支配の側が 30 年かけて私たちの社会を破壊してきたことからの「回復」を、できるだけ早く、できるだけ根っこのところから達成するということが、今後の私たちの闘いの大きな目標になるだろう、と思います。
まとまりのつかない話になってしまいましたが、長時間、ご清聴ありがとうございました。

Ⅲ.「フリートーク」での論議から

「持たざる者の演劇」をどう捉えるか

参加者 A： 今日の菅さんの話の中で、60 年代の「アングラ演劇」の流れの中の「持たざる者の演劇」の過激なあり方を体現した「曲馬館」や、その系譜を現在も受け継ぐ桜井大造の「野戦之月」について触れていましたが、菅さん自身はそういった演劇についてどのようにお考えでしょうか。

菅： もちろん、私としてはそのような演劇の意義を否定するつもりはありませんが、ただ、それは、この国の演劇愛好家の人たちが観るような演劇とは大きくかけ離れたところで存在するものだということは、言ってもいいように思います。普通言われるような演劇とは違いますが、たとえば、いわゆる「ひきこもり」の人たちの社会参加や、精神疾患をもつ人たちの治療の一環といった形で、社会や人間と関わるためのひとつの窓口としての演劇がいろんなところで試みられています。そのようなものも含めて、演劇の「すそ野」や受け皿が大きく成立しています。そういったものと比べれば、桜井大造や翠羅臼といった人たちの演劇は、もっと自覚的で前衛的なものですが、問題は、彼らの演劇が、演劇そのものというよりも政治や何か別のことに向かっているのではないか、ということです。それは別に悪いことではありませんが、プロの演劇と、社会参加や治療のためのものといった通常の演劇でないものとの間に、彼らのような演劇があるということでしょう。
　その一方で、演劇をあくまでも芸術として考える限り、スキルの蓄積を抜きにした芸術表現ということはありえないという意味で、率直に言ってそれではダメだろうと思います。彼らはそれをやっていないというよりも、むしろ、演劇のスキルといったことを軽蔑していて、自らの肉体のプレゼンスや社会に対する怒り・怨念を表現することを大事にしています。それはそれで演劇として成立するのでしょうが、一口に演劇といっても、それは、芸術としての演劇を目指す人たちとは違うカテゴ

リーに属することのように思います。そうだから悪いということではなく、それを芸術としての演劇と一緒くたにしない方がいいのではないか、と考えています。つまり、「持たざる者の演劇」や「地を這う演劇」というのは、いろいろあっていいのですが、芸術としての演劇とは目的や理念が全然違うものなので、その全く違う二つのものがあって演劇が成立している、ということです。

「『生の再生産』過程への総力戦」に対抗する「生きるスキル」を！

参加者 B：　この間、政府は「全世代型社会保障」ということを言っていますが、人間の「生の再生産」をトータルにコントロールしようとするものだという意味で、それは、支配の側からの「『生の再生産』過程への総力戦」のようなものではないかでしょうか。先ほど、演劇のスキルという話がありましたが、そうした支配の側の動きに私・たちの側が対抗するためには、いわば、「生のスキル」とでもいうようなことが求められているというか、そういったレベルまで降ろしていかないとそれに対抗できないように思います。

「全世代型社会保障」の対象者には、いわゆる「氷河期世代」と呼ばれる人たちも含まれているわけですが、「氷河期世代」というのは、「生のスキル」を獲得できなかった人たちと言ってもいいようでしょう。「全世代型社会保障」も含めた「2040年問題」として現れている支配の側の攻撃に対して、本来であれば、そうした世代の人たちが自分たちの積年のうらみを晴らすための闘いがあってもいいはずです。同時に、〈68〉年世代の人たちは、「2040 年問題」と呼ばれる超高齢化社会の当事者であるという意味では、かつて自分たちが闘ってきたことをそうした「生のスキル」としていかに伝えてきたかという責任が問われているはずですが、現在、そうした問題が一挙に吹き出てきているように感じています。そういったことについて、ぜひ、菅さんのお考えを聞かせていただければ、と思いますが。

菅：　そのことについては、私も全く同感です。昨年 10 月の「『米騒動』100 年プロジェクト」の最後の集いで私と一緒に話した人たちというのは、立場の違いはありますが、まさに〈68〉年世代として「生の再生産」の問題を考えようとしてきた人たちです。ただ、残念ながら、言われる通り、そうした問題意識を〈68〉年世代が「氷河期世代」の人たちに手渡すということができていません。「氷河期世代」の人たちは「ロスジェネ」とも呼ばれていますが、そうした継承ができていない分、「ロスジェネ」の人たちは悲惨な状態に置かれています。

全員がそうだということではありませんが、現在、「ロスジェネ」がネトウヨの

書き込みの大きなコア層になっています。ファシズムというのは、そうした形ではびこるものではありますが、今、そのように、多くの人たちが、自分たちの「生」を侵害する側に逆に精神的に同化しているという状況があります。そのような人たちをどのように自分たちの側に招き寄せることができるかが、大きく問われているように思います。

今年度の「プロジェクト」の 1 月の集いで、話し手の入江公康さんが「自分たちの巣穴をつくろう！」と言ったそうですが、それができれば、この社会の中で死なずに済む人たちがたくさん増えるはずです。また、理想的な形で実現すれば、ベーシックインカムということも人間が死なずに済む上で大事なことのように思います。ただ、ネオリベの元祖の経済学者のミルトン・フリードマンさえもベーシックインカムを提唱していて、それは、最低限の生活費としてベーシックインカムを支給さえすれば、後はのたれ死にしようが知ったことではないという「自己責任」に基づくものですから、現在の政権がベーシックインカムを導入すれば、そうなるに決まっています。そのような意味では、ベーシックインカムというものが本当に人間の「生」を保障するための仕組みになるかどうかは、なかなか難しいというか、それ自体が支配の側との大きな「攻防」になると思います。

「全世代型社会保障」というのも、制度として「姥捨て」にするということをあからさまには見せないかもしれませんが、実際にはそうなるに決まっていると思います。それは高齢者だけのことではなく、「全世代型」と言っている以上、今でも捨てられている「ロスジェネ」の人たちや、もっと若い人たちも対象に含めて支配の側は「総力戦」体制に入っているはずですが、運動側がそうした状況に対して旗幟鮮明にして闘うことができていません。

「たまり場」や「陣地」の形成の可能性を探りたい

参加者 C：　先ほどから言われている「全世代型社会保障」に反撃するという意味でも、今、自分たちにとっての「陣地」や「アジール」を生み出すことが強く求められているように思います。菅さんは全国各地のいろんな運動についてご存じだと思いますが、そういった運動側の「陣地」・「アジール」の実例や、その「萌芽」になるような動きをぜひ紹介していただければ、と思うのですが、いかがでしょうか。

菅：　小さな例で言えば、これは、私もつい先日当事者から聞いたばかりの話ですが、神奈川県の東部に拠点を置いている「ひとみ座」というプロの人形劇団がありますが、子育てをしながらそこに最近入団した女性がいます。その女性は、行政と

やりあっても子育てのためのシステムができないというのであれば、私たちでやってしまおうということで、劇団の中に子育てのための仕組みをつくったということです。劇団に入ったばかりの人が、そのような思い切ったことをやったという話を聞いて驚きましたが、たかだか 30 数人ぐらいの集団でも、そうした身の丈にあった「生の再生産」の仕組みを創り出すことは、できないことではないのですね。

おそらく、そのように考えて、自分たちが生きる上で必要な仕組みを生み出している人たちが、日本中にたくさんいるだろうと思います。ただ、問題は、そうした動きが互いにつながっていかないことですが、つながってさらに大きな動きになっていかないかぎり、社会にインパクトを与えるようなことにはなりません。これは今に限ったことではないのかもしれませんが、そうした小さな「陣地」や仕組みを生み出そうとする試みや実践が全くないというよりも、むしろ、それが横につながることができないという現状をどうするか、ということではないかと思います。

そういった試みや実践をしている者たち同士で全国集会をもつというのは、なかなか難しいことでしょうが、共通の課題と個別の現場での問題を寄り合わせて議論をして、互いに学び合いながら次の一歩を共に模索するような作業が求められているように思います。そのように、運動をやっている人たちが、「まずは、寄り合ってみよう」というところから始めるしかないような気がします。今日の集いを企画した富山のグループの皆さんには、ぜひ、そうした各地の運動家の出会いやコネクションを生み出すことを期待したいと思います。

そうした「アジール」・「陣地」のモデルということで言えば、何と言っても「関西生コン労組」です。あれは、まさに巨大な「巣穴」です。何と言っても、生コンの値段を労働組合の言うことを聞かなければ決められないようにさせて、中・小の生コン業者に自分たちについて来いと「大号令」をかけたのですから、資本家にとっては手をこまねいて見ているわけにはいきません。すでに 30 年も前に、三菱鉱業セメント社長で旧日経連会長だった大槻文平が、「あの運動に箱根の山を越えさせるな」と言っていたそうですが、2 年前から権力側は罪状をでっち上げて、本格的に「関西生コン労組」に対する弾圧を行っています。

たしかに、生コン現場の仕事というのは、いわゆる「反社会的勢力」との接点はありますから、そこから生コンの労働者になるということは、いくらでもあるわけです。そうした人たちが組合の中にいるから、「反社会的勢力」との癒着があるということを理由として、正面からは刑事弾圧をかけながら、その裏では「奴らは、所詮ヤクザだ」というネガティブ・キャンペーンを行うという「二面作戦」を展開しています。まあ、実際、「関西生コン労組」の委員長の武建一さんは、組合の学習会で、「ここは組じゃなくて組合だから、そこはちゃんとわきまえろよ」というところからオルグを始めるそうですが。(笑)

そのように、ヤクザの世界から足を洗って生コンの労働者になって、いろんなものを引きずった人たちがたくさんいるのですが、その辺は世論というものはだらしなくて、権力側のネガティブ・キャンペーンに簡単にやられてしまうのです。結局、リベラル派の「聖人君子」の人たちも、そこで腰が引けてしまって、権力側についてしまいます。そのような意味で、権力側のあり方だけではなくて、一般の人たちのものの見方も問われているように思います。そのように、支配権力からの弾圧だけであれば、「関西生コン労組」はもちこたえることができるのですが、世論の支持を受けることができないという状況の中で大きな困難に耐えています。

同時に、そうした状況ではあっても、そこに巨大な「巣穴」があるということは間違いなくあって、そのようなものがこの国の中に 100 もあれば、運動側は負けてはいないでしょう。労働過程の中にはそうした運動がありますが、その一方で、そのことと、子育てや障碍者・高齢者の介護、行き場のない人たちへの支援・相談活動といった「生の再生産過程」での地道な運動が互いにいかにつながっていくかを模索する、ということの両方が必要なのではないか、と思っています。

刊行物案内

ＺＩＮＥ・２　2014・秋
　〈フクシマへ〉折り返すことにむけて
ＺＩＮＥ・３　2015・春
　さよなら　私の死者・たち――「困民丸」の小さな歩みから
ＺＩＮＥ・４　2015・夏
　「敗戦 / 戦後 70 年」は私・たちの〈問い〉か
　　――「ラウンドテーブル・2014」での論議から
ＺＩＮＥ・5　2015・秋
　アンラーニング・2015　問いをもちよる
　　――施設で考えた中途半端な支援と労働
ＺＩＮＥ・７　2016・夏
　私・たちの来歴
ＺＩＮＥ・８　2016・夏
　「階級」という問題の来歴：資料リスト　00 年代から現在
ＺＩＮＥ・9　2016・夏
　我田引用「ヤサグレたちの街頭」考
ＺＩＮＥ・10　2016・秋
　NO WAR, BUT UNDERCLASS WAR ！
　　アンダークラスは〈横謀〉する
　ON THE STREET ／ IN THE NIGHT @ TOYAMA
ＺＩＮＥ・12　2017 年・冬
　復刊　2008 年パンフレット
　「米騒動 90 年」:「米騒動」から何を受け取るのか
ＺＩＮＥ・13　2017 年・冬
　復刊　2009 年発行「ニューズレター」
　〈背後〉の未来が現在と出会うとき――浦島太郎物語
ＺＩＮＥ・14　2018・春
　「熊谷６人殺害事件」のためのノート
ＺＩＮＥ・15　2018・春
　「米騒動」100 年　プレ企画：〈68 年〉から 50 年
ＺＩＮＥ・15　別冊　2018・春
　「米騒動」100 年　プレ企画：〈68 年〉から 50 年　資料集
ＺＩＮＥ・16　2018・夏
　中断していた古い「年表」を書き継ぐ―〈前註〉
　　〈生のサンジカ〉というキイワードへの途のり
ＺＩＮＥ・17　2018・秋
　能登の風に吹かれて　県評オルグ 20 年
　　――多名賀哲也さんが語る――
ＺＩＮＥ・18　2018・秋
　『米騒動』と朝鮮　――異聞「雨の降る品川駅」
　　『米騒動』を抱きしめて
　　― ECHOES FROM THE RICERIOT ―

生・労働・運動ネット富山

2020・冬

代表　埴野　謙二

〒 930-0009 富山市神通町３－５－３
TEL：076-441-7843　Fax：076-444-6093
URL：http://net-jammers.net/
E-mail：jammers.net.tym@gmail.com